
藤の花の匂う頃

yuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藤の花の匂う頃

【Zコード】

Z6635Y

【作者名】

yuki

【あらすじ】

親が金持だが身分の低い花房は、中納言家の姫の婚礼のための新たな女房候補として、京の都に上京するが、この結婚は先の帝に狙われていた。それを知った中納言は花房に姫の身代わりとなる事を要求。花房はそれを引き受ける。その献身的な行動に姫の結婚相手、大将に妻の座を提示されるが花房は返事を出来ずにいた。琴が得意な少女の平安サクセスストーリー。

上京

康行はしつゝへ食い下がっていた。私はうんざり声でさえぎつた。

「いらない物は、いらないの。何よ、そんな安物」

康行は真っ赤になつて言い返した。

「安物なんかじゃないぜ」

「嘘おつしゃい。侍で飼われ者のあんたが、たいしていい物を買える訳がないじゃないの。あんたなんかにもらわなくとも、私はお父様から素晴らしい螺鈿細工や、彫刻の櫛をたくさんいただいているの。田舎長者の娘と侮らないでほしいわ」

まあ、この物のいい方こそが、劣等感の表れなのは分かつていて、康行があんまりしつゝいので、つい、言つてしまつ。

「今度の若君の『』結婚は特別な事だからと、つちの殿様がお手当を大層弾んで下さったんだ。それを田舎にも送らずにお前のために買った櫛なんだ。若君だってこれは良い物だとおつしゃつて下さった。受け取つて、損は無いはずだ」

そう言つて康行は尊大な顔つきをする。

ふん。しゃらくせい。

確かにあんたの『』主人のお父様は、今、京の都を牛耳る大納言様でしそうけど、私の姫様のお父上だって中納言でいらっしゃる。『』主人様の格を言つなら殆んど同格よ。

私は康行を見下した。たとえではなく、本当に縁の上から見下ろしている。なぜなら私はこの、中納言家の一の姫様の女房、と言つても小間使いに近い立場だけれど……であつて、康行は武藏の国から雇われてきた、下男同様の立場、侍だからだ。私はこの屋敷にいる以上、主人の許可も用事もないのに、人前ではしたなく屋根の外へ出る事は出来ないし、康行は大納言家に飼われている立場なので、貴人や女人の上がる建物のうちへは入れない。

しかも、ここは中納言家のお屋敷だ。元の身分は康行と私は同じでも、ここでは私が何かと有利。だから私も強気で受け答えをしているのだ。

「京で男が最初に贈るのは、モノじゃ無くて和歌よ、わ、か。それに私だって國に帰れば武藏で名をはせた長者の娘。あんたなんかに贈られたものを持つていたりしたら、いい赤つ恥だわ」

「たしかにお前の名前は有名だよな。じゃじゃ馬の花房さんよ」

「なんですか？」

私が康行にかみつこうとしていると、女房仲間で姫様の乳母の娘、乳姉妹の「やすらぎ」に声をかけられる。

「花房、こんなところにいたの？ サッきつから探ししていたのに。早くしないと姫様に怒られるわ」

「じめん。すぐ行く」

実はこれはやすらぎの助け船。私が苦手の康行に引っ掛けている

のを見かねて声をかけてくれたのだろう。姫様の元に参上するのが遅れているのも事実だけど、姫様が私達をあからさまに叱つたり、たしなめたりするのを私は見た事が無い。

それでも康行は美しい漆絵の櫛を縁の上に置いて侍所へと帰つて行つた。私も結局そのままにはしておけず、その櫛を手に取つてみる。

確かにそれはみじとな漆絵の、櫛目の細やかなものだつた。上質なものだと一目で分かる。

私の父は身分が低いながらも、金の力を借りて、私にありつたけのモノを買い与えていた。だからモノの良し悪しくらいは分かるのだ。

あーあ。無理しちゃつて。

でも、本当のところは、私こそかなり無理をし続けている。康行は苦手だし、武藏の国の侍は乱暴者で有名だから、相手にするつもりはないのだけれど。それに、なんのために作法見習いに、ここに勤めたのか分からなくなつてしまふのだけれど。物持ちの父に育てられたとはいえ、所詮田舎者。きらびやかな、京の邸暮らしは何かと氣骨が折れる。同郷の康行とちょっとした言い争いをするのは、実はよい気晴らしになつてはいるのだ。

本来なら、こんな立派な方々にお仕え出来る身分ではない私が、下働きの下女ではなく、女房として一の姫様にお仕え出来るのは、父の金の力もあるのだけれど、私が何故か姫様に気に入られたのが

一番の理由だ。

姫様は私の一つ下の十五におなりになる、愛らしい顔立ちの方で、一時は帝の女御様候補にも挙がられた。

だが今は中納言様の政治的お立場が難しい時で、やむなく御入内はあきらめられたのだとか。

実際、帝には何人かの女御、更衣様方が寵を競つていらして、すでに后宮に男御子も儲けられているので、その後を追つたとしても、姫様が幸せになられたかどうかは難しいところ。中納言家にとって政治的なうまみもあまりなかつた。

しかも、早々とその男御子様が赤子の身で東宮になられたので、これはむしろ、早く一の姫に女の子を産んでいただいて、お年頃になられたら東宮の元に入内させる方が、時も稼げて一石二鳥、と、中納言様は考えられたらしい。

そこで、今やこの京の都で最も権力を誇つている大納言様のご長男と、姫様の縁組が組まれる事になった。

そこそこの家柄の姫君や若様なら、評判を聞いて、和歌や手紙のやり取りをして（それでも互いの顔を見る事は出来ないのだけれど）几帳をはさんで会話をしたりして、気が合えばご結婚の運びとなるのだけれど、ここまで上流の、一度は帝の元へ嫁ごうかとされた方にまでなると、気が合うも合わないもなく、家柄と政治力と、親の相性がモノを語つので、お話が来た時点でご結婚が決まったも同然。

さつそく新しい女房や、下女を増やそうと、中納言様が当てを探していた所に、私の父が、今は亡き私の母の妹についてを頼つて私を

推薦させたのだ。

父は今では地元の女性と再婚して、長者としての地位を築いているが、昔は私の母の元に通い、そこで私が生まれたらしい。母は下流貴族の家人だつたらしく、父が財を築く元手になつたのは、母の家人間関係による援助があつた事も大きかつた。母は私を生んですぐに亡くなつたが、普通、女の子は母方の実家で育てられるのが常なのに、父は私を自分の郷里の武蔵の国へ連れてていき、そこで私を育ててくれた。

郷里で成功を治めた父は私に都の様々な情報を与えてくれた。

読み物、詩集、きらびやかな衣装、流行の和歌、美しい細工もの。私は自然と都に憧れをもつた。

いつの日か、京の都で暮らしてみたい。

私は父に甘やかされて育つたせいか、地元で評判のお転婆と言われるようになつていた。父と再婚した義母はその事に胸を痛めていて、

「いつそ花房さんをどこかのお邸にお勤めに出したらどうでしょう？」と、言いだした。

義母にしてみれば、地元の国守の邸に行儀見習いに出すつもりだったのだろうけれど（そう言う事は良くあることなのだけれど）幸い、私には母と仲の良かつたという、母の妹である、伯母とのつながりがあった。都で暮らす絶好の機会である。

私は父に頼みこみ、叔母にきちんと連絡を取り続ける事を条件に、普通では無理であろう権門の家の女房候補として上京したのだった。

叔母の家で支度を整え、他の人たちと中納言様の正妻でおられる北の方、つまり、姫様のお母上様と、姫様にお目にかかる時、誰もがかしこまつて顔も上げられずにいる中で、私はどうしても好奇心に勝てずに、顔を少し上げてお一人のお顔を見ようとした。

そこを姫様の乳母、やすらぎの母親に見とがめられて、失礼だと叱られたのだが、つい、田舎にいた時の勢いで、

「私は身分がいやしいですから、ここで追い返されるやもしません。だつたら都のお姫様のお顔を、一度くらい拝見しておきたいんです」と、言い返してしまった。

皆が息をのむ中で、一の姫様が「口口口」とお笑いになられた。そこで私と姫様は初めて目があつたのだが、その一瞬で姫様は私を気に入られたらしい。問答無用で私を姫様付きのおそばの女房に決めてしまわれた。

姫様の周りには、沢山の女房が仕えている。乳母や大人の実務を取り仕切っている女性達と、どちらかと言えば姫様のお話相手を要求される若い少女達。その中でも最も姫様に近いのは、乳母の娘の、姫様と乳姉妹である「やすらぎ」だ。姉妹同然に育つてるので、彼女が姫様の事を一番よく知っている。姫様のこれまでのいきさつを教えてくれたのもやすらぎだ。

本来なら、身分いやしく、知識も才も、優れているとは言い難い

私なのに、やすらぎは

「姫様がお気に召したのなら、あなたは絶対いい人よ。都育ちではないけれど、決して頭の悪い人ではないわ。それに堂々と、のびのびとしたところがある。姫様はそういう方がお好きなの。きっと私は達も気が合うわ」

と、言つて私を受け入れてくれた。

姫様と同じ年なのだから私よりも一つ下なのだが、とてもしつかりした人なのだ。

田舎者の私がそんな風に大出世したのだから、当然周りにはねたむ者もいた。じゃじゃ馬でならした私はそんな事歯牙にもかけないつもりでいたが、風当たりが強くてはいい気持ちはない。ところがそこをやすらぎが救つてくれた。

「せっかく新しい方々がいらっしゃるのですから、今夜はにぎやかに過ごししたいかがでしょう?」

やすらぎが姫様に提案した。

「それはいいわね。やすらぎの琴も聞きたいわ」

姫様も賛成して琴が用意されるが、やすらぎは琴を一つ用意した。

「花房さん。あなたも少しお引きになつてはいかが? 合奏も華やかでいい物だから」

そう言つて私の前に琴を押してくれる。

私は驚いた。琴は得意中の得意だ。父が都から來た人を呼んで、私に習わせてくれていたのだ。和歌の応酬や、都人の礼義には弱い私でも、琴なら負けずに弾きこなせる。

私がやすらぎとの合奏を終える頃には、周りの見る目が変わっていた。私はあとでやすらぎに尋ねた。

「どうして私を合奏に誘ってくれたの？」

「手を見たのよ。あなたの手には琴を弾く時のタコが出来ていたの。よっぽどたくさん練習されたのね。これなら絶対に素晴らしい音を聞かせてもうえると思ったの」

そう答えて、姫様と視線を合わせてにっこりと笑った。どうやら姫様とは何でもピン！とくる仲で、姫様も承知していたらしい。

権門の家のお姫様となると、こんな召使の人間関係にまで心配りが出来るのか。私は感心してしまった。

後に、これはこの一人の独特の特性で、どこのお屋敷に上がりても同じとは限らないと知ったのだけれど。

だから本当のところ、私も和歌や、詩を吟ずるのは苦手で、康行に言つた言葉はまるで当て外れなのだけれど、同じ田舎者の私としてはこの方法が康行を手取り早く遣り込める事が出来るので、つい、「歌の一つも詠めない」と言つてしまつのだ。

それに父が私を都に出したのは、当然、都人とのつながりを意識している。

私が都の身分が上の男とつながりを持てば、それが一番だし、そうでなくても私を経由して都人たちとの人間関係を父は持つことが出来るだろう。万が一にも、貴人のお手つきにでもなれれば万々歳

だ。さすがにそれは無いだろ？
けど。

だから、同郷で、身分が同じで、経済的には私よりも低いはずの康行なんかに私がかかわったとなれば、父はがっかりするはずだ。
だから私は康行には辛辣になるのだ。

中納言家では婚礼の仕度が着々と進められている。今後は大納言家の若君が、毎夜通われる事になるので、屋敷の中を増築し、そこを御新婚のご夫婦の寝所にする予定である。

若君は去年の春の除目で、少将から中將に御出世されたばかりだが、あの大納言のご長男、宮廷内での評判もいいとのことなので、今年の春には早くも大將になられた。つまりは出世街道まっしぐら。勢いのついた若い上達部、貴公子という訳だ。

そういう婿君を通わせるのはその家にとつても大変な名誉で、人々の関心も集まるし、家族、親せき一同の出世や立場にも大いにかかる。そのため婿君へのもてなしは、それはそれは心も贅も尽くしきられたものでなければならない。屋敷の中はてんてこ舞いだ。

大工や職人の出入りも激しく、庭先を見知らぬ人の姿が通り過ぎたりしている。今の姫様の部屋の方や、中納言様の北の方の寝所は静かなたたずまいを保っているが、ちょっと用があつて渡廊と呼ばれる、館と館をつなぐ橋状の専用通路を渡つていくと、沢山の人�이てびっくりしたりする。

これは遠い唐土の国や、もっと遠くにある国でも同じだそうだが、貴族の方々は御家族とはいえ同じ屋根の下で暮らすという事が無いらしい。大きな邸の敷地の中に、それぞれの館があり、それぞれに人が雇われ、設備を整えて暮らしている。

私は物持ちの父が贅をこらした邸に暮らしてはいたが、父や義母

と部屋は違えども同じ屋根の下で暮らしていた。

家が違うのは、下男や下女の者たちで、あとは父が通う先の女人達ぐらいだろうか？

「同じ屋根の下で、家族で毎日ともに食事が出来る。これは貴人は無い楽しさだ」と、父は言っていた。

初めのうちには、姫様のご家族が、まず歌や手紙で御訪問の旨を伝えてきて、お返事の歌を送り、先駆けの者が来訪を伝えてから、ご本人が渡廊を渡つてお出ましになるのを私は物珍しげに見いつてしまった。

物語や本で知識としては知つてはいたが、その段取りや所作を見たのは初めてで、私も憶える必要があった。

私のお仕えする姫君様はまだ御母上である北の方様のお部屋の近くに住んでいられるけれども、増築先が整えば、そちらに移つていてただく手筈になつてている。だから私達も引っ越しの仕度に大わらわだ。

婿君とそのご家来のご衣裳の仕度を整えるのもこちらの役目、日が傾いてくると、油に火をともして縫い物に追われる。お針子の下女もいるにはいるが、それでも間に合わないのだ。

そんな忙しい中、私は姫君様の庭先に数人の侍がいる事に気がついた。その中に康行もいる。

「なんで大納言家の侍達がここにいるの？」
私は康行に尋ねた。

「のんきな奴だな。こんな大きな邸にこれだけ大勢の人間が出入りしているんだ。いつ、何が起こるか分からぬじやないか。中納言家の侍だけじゃ足りないだろうと、俺達も大納言様に言われて助つ人に来ているのさ。お前なんかは知らないだろうが都つてのは物騒な所なんだ。盗人に強盗、人さらいに人買い。特に女子供は狙われやすいんだ。たとえ権門の家の女房でもな」

「まさか。あんた私を怖がらせようつて思つてるんでしよう？」

私は秘かに、康行は長者の娘である私を出世のために狙っているんじゃないかと疑つてゐる。郷里に帰れば田畠を耕して暮らしていられるであらうが、私に対して少々なれなれしいのが引っ掛つているのだ。

「本当にお前さんは世間知らずだな。いいか、都じや女はいい金になるんだ。まず、その着物だ、上質の絹の袴から、肌触りのいい綿の下着まで、幾重にも重ねたその着物だけで、貧乏人は当分、面白おかしく暮らせるんだ。それに髪の毛だ。その長い髪はいい、かもじ（つけ毛）の材料になる。髪は女の命だから、買い手は引く手あまだ。そして本人は淀の遊び女の元締めに売られて、春を売ることになるんだろう。その時も出自が良ければいいほど金になるのさ。姫君だつて今時は危ないんだ。へたすりやかえつて狙われる」

そう言えば、女房達の間でも噂になつた話がある。さる権門の家の姫君が、家人に裏切られて夜中にさらわれ、そのまま行方知れずになつてゐるが、東の国よりも北の地の遊び女に、姫君にそつくりな女がいたんだとか。

「特に、ここ最近は物騒な事になつていて。まして今度の『ご婚礼』は世間の注目の的。何かあつたら、大納言様も中納言様も面田は丸つぶれだ。他にも男の社会には色々あるらしいが、俺もそこは噂しか知らない。何にしても俺達はお前さんの姫君をしつかり守らなければならぬんだ」

「そういわれると邸の中にぎわにも、何か落ち着きのない騒々しい物に聞こえてくる。

「嫌だわ。せっかくのお祝い事なのに」

「そう思つんなら、お前さんも姫君から離れないでいてほしいもんだ。それにあんまり動き回らない方がお前さんのためにもなるだろう」

「どういふ意味？」

「何か遠回りな言い方だ。」

「ハハハ、新参者は疑われる。ましてあなたは出自がいい方じゃない。金をつかまされて何かしでかすんじゃないかと、疑つている人間もいる筈だ」

「私がそんなことする訳ないじゃないの！」

思わず声を荒げてしまう。

「そういう見方をする人間も多いんだよ、都には。実際そういう事が起つていいんだからな。誰もが用心深くなつていいのさ」

そこまで行くと、用心深いというよりも、疑心暗鬼という言葉の

方がしつくりくる。しつかりした紹介があつて、身元を調べつくした召使まで、信用できない世界なのか。

物語で姫君がさらわれると言えば、悲恋の恋人が姫を拉致するとか、人妻に恋する間男が、思いあまつて夫人を連れ去るとか。そう言つた美しい世界は、現実にはあり得ない物らしい。

「まさかとは思うけど、あんた達は大丈夫なんでしょうね？」
そう聞いて白状する悪党はいないのだが

「そうそう、そのくらい用心深い方がいい。お前さんは姫君から離れるな。なんだかんだ言つたって、姫君のいらっしゃる所が一番安全だ」

真剣に話していたかと思うと、からかいのそぶりが見える。どこまで気を許せるのか分からぬ。

「分かつたわ。でも、あまり姫様の近くに姿を見せないでね。ご結婚前の落ち着かない時なんだから、少しでもくつろがれる時間を持つていただきたいの」

本当にそう思つていた。例の琴の一件から、私は姫様への肩入れする気持ちが強くなつていた。

「そこは俺達も若君に言い含められてゐるよ。うちの若君もなかなか面白い人なんでね」

そう言つて康行は仲間の元へ戻るつとしたが、思い出したように振りかえると

「あの櫛は氣に入つたか?」と、聞いてきた。

「何のこと?」

私はとぼけた。

「……まあ、いいか」

そう言って今度こそ康行は背を向けて歩いて行った。

それにしても、康行という男はどういう男なのだろう? 私はちょっと気になつた。

たかが侍。若君付きの従者と言う訳でもないのに、従者や使いの方が来る時にはいつも康行が警護についている。大納言家ともなれば、飼っている侍の数は相当なものだろう。その中でも高貴な方々に近い所にいつもいるような気がする。下男と変わらぬ立場にありながら、それほど信頼されているのだろうか?

その日の夕方に私は姫様にお声をかけられた。

「私の三日夜の宴の席で、あなたも琴を弾いてもらいたいの」

私は仰天した。そんな大切な席の演奏を新参者の私が勤めたりしてよいのだろうか?

『結婚は三日の時間が必要だ。まずは初夜。姫君が姫君のお部屋を訪れて、お二人が初めて顔を合わせる晚だ。そして翌日も姫君はお部屋に通われて、いわば相性を確かめる。

そして三日目の夜に姫君のお披露目として盛大な宴が催されるの

だ。その後お一人で正式なご結婚をされたあかしとして、三日夜餅と呼ばれる姫君側で用意したおもちを召しあがつていただく。

「この時三日間男君が通わなければ結婚は成立せず、女君は愛人という事になつてしまふ。だから形式的とはいへ、三日三田の夜の宴はとても重要なものなのだ。

この田の客人達は両家の親族は勿論、中納言家の面子をかけたそうそつたる顔触れになることだらう。演奏に携わる方々も、当代一流の演奏家たちが集められるはず。その中で私に琴を弾けと？

「そんなに緊張しないで頂戴。もちろんやすらぎにも弾かせるわ。この間の合奏のような演奏で私の婚礼を是非、飾つて欲しいのよ。あなた達の演奏はどんな名演奏よりも私には価値があるの」

「やつ、言つていただけるのは本当にありがたい、とても名誉なことではあるけれども、じゃじゃ馬の私も、これには緊張する。あまりの事に背筋にひんやりと汗をかいてしまう。」

「どのような演奏家がいらっしゃるのかどうかがうと、宮中で大切な儀式の時に帝の前で演奏なさつてこる有名な方の名前がポンポン出て来る。聞かなきやよかつた。」

「私はあなた達が心をこめて演奏してくれれば満足よ。でも、急にこんなことを言われても緊張するなという方が無理でしょ。あなたはまだ、この邸にも慣れているとは言えないのだし。練習する時間あげましょ。花房はしばらく縫い物はしなくていいわ。夜の参上も控えてよろしい。心が落ち着くまで練習に励みなさい」

「励みなさい、と、言われても。」

しかしここまで言わると断ることもできない。私ひとりならともかく、やすらぎも弾くとこうのだから逃げ場が無い。

仕方なく、私はしばらぐの間、琴の練習に明け暮れて過ごすこととした。

このことを叔母を通じて父に知らせると、父は家の誉れと大喜びで、新しい琴と弦を用意してくれた。使い慣れない物では心もとないのだが、せつかくの心づかいなので、練習で慣れる事にする。

衣装も抜かりなく用意できそうだ。康行ではないが、女房は正装にお金がかかる。格の高い方々は、上質で軽く、暖かい品の良い衣装に身を包むが、私達は失礼のないように、十一の衣を身にまとめる。質はともかく、きちんとした光沢のある綿を色とりどりに染め上げて、宴の花としての振る舞いが求められる。見ようによつてはひとつ財産を抱えているような物なのだつ。

演奏するには邪魔なのが本音だが。

上達部（かんだちめ）

それから私は、毎晩琴の練習に励んだ。もしも失敗しようものなら、自分の恥は勿論、家族や、この中納言家の人々にまで恥をかかせてしまいかねない。

私は父親が下司（庶民）の娘という事で、陰ではいろいろ言われているはず。そんな私が公の大切な席で失敗などしようものなら、中納言家に泥を塗るようなものだろう。

皆が忙しげにしている中での練習なので、私は遠慮をして、局と呼ばれる私達女房の宿泊場所の前にある縁に出て、一心不乱に琴を弾き続けていた。康行の話を聞いてしまった後なので、少し不安ではあつたが落ち着いて弾ける場所が思いつかなかつたのだから仕方がない。だから人の気配には全く気付かずにいた。

ふと、品のいい匂いがした。焚き締められた香のにおいだ。

女物の香ではない。中納言様の香でも、その従者の匂いでもない。だが明らかに上質な、貴人が使うであろう香りがする。しかしここは姫君の部屋の近く。いくら寝所からは遠いとはいえ、男性の貴人が案内も乞わずに入つてきてよい場所ではないはずだ。私は一気に緊張した。

こういうことは全くない訳ではない。姫君の元に男君が通う時は、従者や女房、あるいは従者の知り人の上達部にとつても、逢引の機会になつていてる。昼間、手紙で連絡を取り合つて、夜、人気のない場所でこつそり逢瀬を重ねるのは、恋人同士にとつては常識だ。だが、この香はあまりに上品すぎる。それに女人の気配も感じないので。

「良い、音ですね。もうしばらくお聞かせいただきたかったな」

そう言つて、暗闇の中から一人の上達部が現れた。すつきりとした顔立ちの、十七、八の青年だ。私は慌てて扇を広げて顔を隠した。いや、隠そうとした。

女が貴人に顔を見せるのははしたないこと。不用意に縁に出たりせず、御簾の中から顔を出さず、いざという時は扇を開いて顔を隠すのがたしなみ。そんな事わかつちゃいるけど、不慣れなしぐさに私はうろたえ、うつかり扇を落としてしまつ。上達部はクックと笑いながら私に扇を拾つてくれた。

私はあらためて扇を広げ直し、すでにバツチリみられてしまつたであろう顔を隠し直した。顔を見せるということは、裸を見せてもかまいませんと、宣言したも同じこと。大失態だ。自分が一気に安っぽくなつた気がする。

「どなたかとお約束があるのでしょうか？　あいこくひらには誰もいませんけど」

精いっぱい氣取つた声を出す。とにかく落ち着かなくては

「約束事があつた訳ではないのですよ。従者や下男、侍達の取り繕わぬ姿を垣間見ようかと思いましてね。するとこちから美しい琴の音が聞こえたもので」

「琴は音を楽しむもので、演奏者の姿をじ覽になるものではありませんね」

私はわざと相手を非礼だとたしなめた。私の方の失態ではあるけれど、こつちは女。いつも時に身分がどうのと言っていたら、舐められてしまった。

すると上達部はブーっと吹き出してしまった。そしてとうとう本格的に笑い出す。

「武藏の国のじやじや馬姫から、そのよつな言葉が聞けるとは思いませんでした」

「私を御存じですか？」

私はビックリした。実は都に来てから若い公達（公家の若者）をこんなに間近に見たのは初めてのことなのだ。何故私を知っているのだろう？

「侍所の康行から聞きました。武藏のじやじや馬姫は琴の名手で、今は局で毎晩琴を弾いていると」

また康行！ なぜ、身分の低いあいつが、この方とそんな話をしているのよー

「ああ、気にならないでください。康行は私にとって特別なのですよ」

「特別？」

「私は馬が大好きでね。特に流鏑馬の馬にはことわり凝つてこるので

ですよ。康行は良い馬を育てる名人なんです。彼はもう、何度も都に来ていて、そのたびによい馬を用意してくれる。ただの侍として飼うにはもつたない男です。身分がら従者にする訳にはいかないが、大納言家でも、彼のことは一目置いて、信頼しているのです。初めて大納言家に来た時も、私の可愛がっていた馬が生きるか死ぬかの瀬戸際で、康行の適切な治療と、懸命の介護のおかげで命拾いをしたんです。それにお互いに馬好きですから私は彼と気が合つんですよ」

「康行と気が合つんですか？」

立派な公達が、康行なんかと気が合つのか。荒々しげな武蔵の侍と。

「あなたは誤解している。康行の刀の腕は決して悪くはないが、あれはそんなに荒ぶった男ではありませんよ。一頭の馬のために身を尽くして世話の出来る優しい男です。白状すると、そんな康行がお気に入りの武蔵のじやじや馬姫とはどんな女人なのか、確かめてみたくてこつそり垣間見に来てみたのです」

最初から私が目的だつたつていうの？ いかにも貴公子と言つた風情の方が、なんとまあ。

「あなたは大納言家の方なのでですか？」
私は聞かずにはいられなかつた。

「ゆかりのものですよ。」こちらの姫君はもうすぐ大将と結婚されますね。姫君はどのようなお方ですか？」

「お美しい、といつよりは愛らしいお姫様です。御心も優しくて決

して声を荒げたりなどなさらない、私のような、取るに足らない者にまでとてもよくして下さいます」

「あなたが姫君のお気に入りだといふことは聞いていますよ。あなたを見れば姫君の人柄も分かるようだ。武藏の国には素朴でよい人柄の人間が多いのでしょうかね。よい国なのでしょう」

私は氣を良くした。郷里を褒められて悪い氣はしないものだ。

「大将も、康行があ氣に入りですよ。あなたの姫君とも相性が良いことでしょう。この縁組はきっと良い縁組になる。社会的な事だけではなく、姫君のお幸せのためにもね」

そう言つて上達部は立ち去るがつとする。

「あの、あなたは……」

「私がここに来たのは誰にも内緒ですよ。私のことならすぐ分かることでしょう。では、宴の琴の音を楽しみにしています」

そして上達部は去つて行つてしまわれた。私は呆然とするばかりだった。

「内緒ですよ」とは言われたが、私はこの一件を内緒にしておくつもりはなかつた。あまりにも危険すぎる。

私が世間知らずでも、深窓の姫君のお部屋近くに、高貴な身分に見えたとはいへ若い男がつらつらしていいいはずがないことくらいは分かつてゐる。

昨日の様子や話しぶりから見ると、暇を持て余した大将様のお知り合いの方が、康行から何かしら私の話を面白おかしく聞かされ、いたずら心を起こして私をからかいに来られたのだろう。

ただ、ここは「」婚礼前の姫君の住まつところ。しかもいつも以上に厳重な警備が敷かれている中での出来事である。どうやって忍んでこられたのかは分からぬが、放っておくわけにもいかない。

それに若君の事を「大将」と、軽く呼んでいらした。少なくとも従者や、乳兄弟ではない。もつと上の方だ。

身分の高い方は、実の親子でさえも簡単に訪ね歩くことはない。同じ邸のうちでさえ手紙のやり取りをする。

昨日の公達は「」言つちゃなんだけど、ちょっと軽々しい方なんじやないかしら？

そういう方が何か間違いでも起こせば、大変な事にもなりかねない。でも、いきなり姫君に言つのもちょっとなあ。

康行の事に随分詳しそうだつたし、ひょっとすると康行があの公達にそそのかされて庭先に通したのかもしれない。

私に気をつけるよ「」言つておきながら、油断も隙もありやしない。

「そんな事があったの？ なんだか信じられないわ」

私と局で同室になつている桜子は、目を丸くしてひつそりと声を立てた。

「私は康行が手引きしたんじゃないかと思つてているんだけど」

「そうかもしれないわね。警備にあたつている本人でもないと、今邸の守りをかいぐぐるのは難しそうだわ。ねえ、これはそれとなく姫君様に伝えておいた方がいいわよ」

桜子は珍しく人のいい顔を曇らせていう。

桜子は私と女房仲間で一つ年上。越後の国の受領（国司）の娘で、越後育ちだ。とても色が白い。

私が来る前は彼女も田舎受領の娘という事で、肩身の狭い思いをしていたらしいが、人のよい、おとなしい人柄の優しい娘だ。同室になつてみると、意外に明るいところもある人だと分かつた。肩の凝らない人なのだ。

彼女は私に同情的で、自分と似たような立場の私をかばいたくなるようだ。最も私の身分では本来彼女の下に召し使われてもおかしくないのだけれど。

「でも、警護の侍が手引きしたかもしれないなんて、姫様を怖がるせるだけなんじゃなかっしゃら?」

私はためらう。

「康行の事を心配しているのね？そこまではつきり言つ必要はないわ。約束した女房の誰かと落ち合えなかつたらしい公達が、庭先をさまよつていたとでもいい繕つておけばいいのよ

桜子はこうこう「」とも物慣れていて、すぐに知恵を授けてくれる。やっとだけ康行が心配でもあつた私は、その知恵に乗つて姫様に「」報告した。

その日の毎間、その康行が私に声をかけて來た。

「お前、昨夜、上達部と話をしたんだって？」

はつきりと「」機嫌斜めな顔が浮かぶ。

「私だつて姫様付きの女房だもの。そつこう「」とだつてあるわ」私はつん、としたまま答える。

「あんたの事に随分詳しい方だつたわ。本当はあんたがあの方を忍びませたんじやないの？」

「俺がそんなことするもんか。この間注意したばかりだつてのこ、顔まで見せたそうじやないか」

私は真つ赤になつた。そんな事まで聞いているのか

「偶然見られちゃつただけよ。だいたいあの方だつて軽々しいわ。」こは大将様の「」結婚相手の住まわれている場所なんだから。一体どうこう方なのよ？ あんた、知つているんでしょ？」と思わずまくしたてる。

「そんなこと教えられない。まつたくなんてじやじや馬だ。琴ぐらい御簾の奥で弾いていられないのか？夜に貴人の前で顔を見せればどうこうことになるか知らない訳じやないだろ？」「

康行も言ひ返してきた。

「あら、それならそれで結構よ。私が女の身で出世の糸口をつかむかもしないじゃないの。そうなれば誰も私を見下せなくなるし、お父様の立場もすつと卑へなるつてものよ」

「お前、本氣で言つてゐるのか？　お前の身分じや殆んど間違いなく愛人扱いだぞ。暮らしに困つた親無しの娘ならいざ知らず、わずかばかりの地位を上げるために本妻の方々に一生頭を下げ続ける人生を送つて、何が出世なもんか。そういう女は表はともかく、裏では男達に見下されているんだぞ。よく考えろ」

考へてるわよ。別にそれほど本氣で言つた訳じやない。康行が面と向かつて「顔を見せた」なんて言つから、引っ込みがつかなくなつたんじゃないの。どうして東男つて、纖細さの欠片もないんだろう？

「少なくともあんたみたいな侍なんかの相手をするよりはよっぽどましだわ。それに私がそんなに簡単に男君を近づけると思つてんの？　馬鹿にしないでよ」

私は心とは裏腹な事を言つていた。あの時は顔を見られてしまつた事に動搖した上、初めて若い公達を前にして、すっかり普通ではなくなつていた。私は身分が低すぎるから、本氣でかかるれば誰にも助けてはもらえないだらう。向こうつもあまりみつともない真似はしないだらうけれど、経験が無いので本当のところは分からぬ。

正直、今頃になつて冷や汗の出るよつた思いをしている。

「じゃじゃ馬のお前なら大丈夫か。思ったよりは冷静だつたんだな

全然冷静ではなかつたのだけど、私にだつて意地がある。」
「誤解しておいてもらいたい。

「今日はいつの若君がこちらを訪ねにくるや」

「え？」

「中納言様にお話があるらしき。姫君のところへもござ挨拶があるだ
らう。それですべて分かるや」

そう言つと、康行は私の返事も聞かずに不機嫌そつこ去つて行つ
てしまつた

身代わり

その夜、中納言家はにわかにざわめいていた。大納言家の若君、近衛の大将がおこしになつてゐるのだ。

只今中納言様ども歓談中で、後ほどこちらへも御挨拶に来るところ。

御挨拶と言つても、姫君と大将様は顔を合わせることはできない。奥に引きこもられた御姿も見えないし、もちろん姫君の御声をお聞かせするわけにもいかない。事実上、周りで働く私達との顔合わせのようなものである。

果して姫君様のお相手はどのような貴公子なのだろうかと、私達はワクワクしながら待つていた。

姫君は部屋の一番奥の御簾の中、さうに几帳を立てたその奥に脇息に持たれていらつしゃる。

そのそばには乳母の君と上?と呼ばれる古参の女房が控えている。手前にはやすらぎ達若い女房。その中に私もいて、御簾のうちから出てきては、畳や敷物の用意をする。客人のお世話をするのに顔を隠す訳にはいかないので、皆、かしこまる意味も兼ねて頭を低く垂れている。

知らせを受けてしばらくすると、衣擦れの音とともに大将様がやつてきた。私は一層深く頭を下げる。

「春とは言え、いまだ梅も咲き初めぬような冷やかな夜に、わざわ

ざ足をお運びください、ありがとうございます」

姫君の御言葉を声が良くて同じ年ごろのやすらぎが、大将様にお伝えする。

「本日は中納言殿に」相談があつてお伺いしたのですが、こちらにも少し御挨拶を思いました」

大将様の御声を聞いて、わたしは「え？」と、戸惑つた。聞き覚えのある声だ。

下女が運んでくれた酒と肴を御前にお出しするのに、私は思い切って大将様のお顔を見た。

そこに座つておられたのは、昨夜、私をからかわっていた、あの上達部だった。私は啞然とした。

どおりで「大将」と、軽々しく呼んでいらした訳だわ。だつて当のこ本人だったんだから。

警備の間をすり抜けられたのも至極当然。姫様の部屋の周りの警備に侍を用意したのは大納言家。おそらく大将様ご本人だ。ここでの警護に誰よりも詳しい。皆の前では私も大将様も知らんぷりをしていたけれど、おそらく大将様の心の中では昨夜のように噴出していたに違いない。

なんてばつが悪い。

こんなこと、誰にも言えやしない。姫君様のご結婚相手に、夜、

人気のない所で、顔を見られてしまつたんだから。

大将様がお帰りになられた後、皆がかしましく大将様をほめたたえる中で、私はつい、黙りがちになつてしまつた。

姫様ややすらぎが心配するのは分かつていただけど、私の中で大将様は「変な公達」から「とんでもない公達」に格上げされてしまつていたので、とても口を開く氣にはなれなかつたのだ。

「どうしたの？ 具合が悪いのなら下がつて休んでいいのよ
そう姫様に言われると、申しわけなくなるんだけど。

そこへ今度は中納言様のお使者がいらっしゃつて、私とやすらぎに話しがあるから参上するようになると言われる。

乳母の君や、上の方々を差し置いて、私達に話しなんて。昨日から異常事態のてんこ盛りだわ。

中納言様の前に参上すると、中納言様は北の方とともに深刻な趣でいらっしゃつた。

「実は今日、大将殿がうちに來たのには訳がある。このままでは一の姫の身に危険が及びそつなのだ」

私とやすらぎは顔を見合わせた。どうこうことだらけへ。

「今上の兄帝で、前の帝だつた方を知つてゐるな？」

前の帝はお小さい頃から御気性が荒く、帝の地位につかれてからも、中納言様とのそりが合つてはいなかつた。

そのため何かと政務上の衝突も多く、國の人心も真つ一いつに割れてしまつた。

そこで中納言様は一計を案じた。その頃、前の帝には大変ご寵愛が深い女御様があられたので、その方がご病気になつた際に、病氣平癒の祈願に大変効果があるという、ある僧侶を宮中に招いて、日々、祈祷を続けさせた。

その僧侶は日ごろから國の政策が二つに割れている事に心を痛め、女御様のご心配のあまり氣の弱くなつてゐる前の帝に、連日のように御国譲りをそそのか……いや提案してゐたという。

その甲斐あつてか、前帝は弟宮にその地位を譲られた。そして女御様も回復したかのように思われた。

ところが女御様は翌年になつて死んでしまつた。

当然中納言様は前帝に恨まれた。このような形で帝の地位を追い落とされた前の帝に同情が集まり、中納言様の信用は落ちてしまつたかに見えた。

それを追つて今度は大納言様の力が大きくなつていつた。世の流れは大納言様と今の帝へと移つていく。

しかし中納言様もしたたかだつた。大納言様が勢力を伸ばすのに、中納言様も自ら全精力をかけて協力していた。大納言様はとうとう

都の勢力のほとんどを支配するにいたつた。自らの娘を後に据え、東宮を産ませ、盤石の地位を築いたのだ。献身的に協力していた中納言様もそれに次ぐ力をつけた。

一度、信用を落としているので、いまだに政敵も多く、一の姫様の御入内は叶わなかつたものの、こうして大納言家との結婚にこぎつけて、両家の力と依存しあう関係はますます深まつてゐる。これは國中の人に知つてゐることだ。だから、前の帝、と言えば、この邸では中納言家を恨む恐ろしい方、というのが普通の見方になつてゐる。

「前の帝が嵯峨野の別邸に、怪しい者達を集めていると聞いた。色々と探つてみるとどうやらこの結婚を阻むために姫を拉致しようとしたくらんでいるらしい」

「これ程警備が厳しい中をですか？」
「わかには信じがたい。

「花房、先ほど大将殿に聞いたのだが、昨夜、お前は大将殿と会つたそうだな」

私は思わず青くなつた。男君が女房を相手にするのは許されいふとはいへ、（むしろ、邸に引き留める理由は多い方がよいとはいへ）今は結婚前だ。間が悪い。

「も、申しわけございません！」

「これでは暇を出されても仕方がない。なにもなかつたことをどう証明しよう？」

「お前を責めるために呼んだのではない。詳しい話は大将殿から聞いていい。実はお前に頼みがあるのだ」

「私に、ですか？」

「お前に姫と入れ替わってもらいたい」

一瞬、私は息が出来なくなつた。いつたい何を言い出すんだろう？

「さつき、お前に聞いたとおり、大将殿は昨夜、姫の近くに忍び込む事が出来た。つまり、内部に詳しい者が裏切れば、姫をさらうことは、決して不可能ではないということだ。昨夜、大将殿はそれを試されたのだ。今、この屋敷には大勢の人間が出入りをしている。このままでは危険だ。そこで姫を別の場所に移そうと思うのだが、姫がいないことを怪しまれては困る。そこでお前に姫の身代わりを務めてほしいのだ」

「身代わり？　この私が？　よりによつて姫君様になり変われとうのか？」

「そんな事が出来るのでしょうか？」

私はすぐには頭が回らなかつた。隣でやすらぎも睡然としている。

「姫の新しい寝所には、明日にも移る事が出来よう。少し早まつたが明日、さつく引つ越しをする。その時にお前と姫に入れ代つてもらう。このことを知っているのは私達夫婦と乳母、姫のごく近しい女房達だけだ。上者の者達と乳母には姫について行つもらひ。お前には新しい寝所で、やすらぎ達と一の姫として三日夜を迎えて

もりが。その夜の宴の時にまた入れ替わつてもう一つ手筈にしようと思つ。礼はどんなことでもする。これはぜひ、引き受けもらいたい

い

「ひでやすらぎが口をほさんだ。

「待つて下さい。花房さんの身の安全は守られるのですか？」

「警備は今まで以上に厳しくする。もちろん花房は寝所の奥から動いてはならない。出来うる限り家人にも姿を見せずにいてほしい。やすらぎ、お前は姫の事に一番詳しい。いかにも姫がそこにいるようふるまつてほしい」

姫様は寝所の奥で、結婚を待つ身。確かに黙つていればやすらぎの演技次第で「まかすことは可能だろつ。しかし、私としては問題がもう一つある。

「三日夜の宴までの身代わりとおっしゃいましたが、その前の二日間に大将様は御寝所に通われる訳ですね」

それがどうこうと意味するのかは、知つていての依頼なのだろうが。

「結婚には三日間、通うのがしきたり。当然大将殿も通われるが、事情はすべて知つておられる。大将殿はお前の顔を見知つているのだし、勘違いなさることはない。大将殿なら決してお前を悪いようにはなさらないだろつ」

やつぱり。中納言様は私をかなり軽んじてらつしゃる。命は守つ

て下さるだろうが、あとは大将様の御心次第か。身分のいやしい私が顔を見られている以上文句は言えないという訳だ。

私だって、ここまでされればこんなお話はお断りしたい。身分は低くても低いなりに、女人としての自尊心はある。

でも、ここで私が断つても、他にこの役を引き受けける女房がいるとは思えない。こんなことまでするということは、本当に姫様の身に危険があるということなのだろう。

やすらぎが心配そうな視線を私に向けてくれている。姫様がいなければ、私はここにいることは無かつた。

「分かりました。お引き受けいたします」

「あなたは昨夜、公達を見かけたのではなく、大将様にお会いになつたのね」

姫様の部屋に戻る道々、やすらぎは私に問いかけて來た。

「やすらぎ、私、大将様とは」

「分かつてるわよ。なにもないんでしょう？　あなたは琴を弾いていて、引っ込み損ねただけ。それに女の部屋の前に忍び込んでこられたのは大将様のほう。あなたは何も悪くないわ」

「ありがとう。信じてくれて」

中納言様に軽んじられたあとだけに、やすらぎの気持ちが身にしめる。

「あなたのような人が姫様を裏切るような真似が出来る訳が無いわ。夜がれ（夫が通わなくなる）の心配がある夫婦ならともかく、これからご結婚なさろうという方に、あなたの方から声をかける訳が無いじゃないの。こういう時は身分を気にしてはだめよ。あなたは堂々としている時が一番輝いているんだから」

こんな風にやすらぎに励まされていると、郷里に吹ぐ、一陣の風を思い出す。向かい風に向かつて何かに立ち向かっていく時の、湧きあがるような心を取り戻すことが出来た。

「でも、本当に良かったの？　こんなことを引き受けてしまって」やすらぎは心配してくれる。

「ええ、大丈夫よ。両家とも面子をかけて私を守ってくれるはずだし、大将様も、昨夜お話した限りでは少し軽々しいところはあっても、いい加減な方とも思えなかつたし。私がしつかりしてさえいれば、事はうまく運ぶはずよ」

私は取り戻した自信を支えに、心がすくと立ち上がったように感じていた。

侵入者

その夜のうちに私と姫様の入れ代わり計画は準備を整える事が出来た。

勿論、姫様は私を心配して反対なさつてくれたけれども、私はもう、腹を固めてしまっていた。

こんなこと、叔母や父に言う訳にはいかないので、私は宿下がり（休暇）をいただいて、女房仲間と都でも有名な清水の観音様におこもり（寺に数日間の宿泊をして祈願を立てる）に行くという事にしておいた。これなら私と連絡が取れなくなつても心配されることはない。

万が一のことを考えて、私達は姫様がどちらに身を隠されるのは聞かないことにした。余計なことは知らない方が安全かもしれないし、最悪、私達の身に何かがあつても姫様の身だけは守られることだろう。

翌朝には新しい寝所に姫様は入られ、その一番奥の、塗籠と呼ばれる四方をふすまに囲まれた、外から全く見えない小部屋の中で、私と姫様は衣装を取り替えて入れ代わった。

姫様は乳母の君と上?達に守られながら、そつと牛車に乗り、いざこかへと姿を消される。

私はしばらくの間、やすらぎと寝所の奥で、声も立てずにひつそりと暮らさなければならない。

その時間を利用して、やすらぎは姫様のじぐさや癖、お好み、さらにはお小さい頃の思い出話などを教えてくれた。

やすらぎの思い出話は、姫様の今の性格が作られた理由を知る手がかりになった。

帝が変わられ、中納言様に非難が集中していた頃、邸の外の噂話などを幼い姫様にお聞かせしないようにと、誰もが相当気を使っていたため、姫様は自分の周りの人々が冷たく感じられたらしい。腫れ物に触るような扱いに日々鬱憤も溜まっていく。そのうちにお顔の色も悪くなり、食欲まで無くされて、ものだけでもついた様になってしまわれた。御心配された中納言様は、姫様を吉野のお寺へと連れて行かれた。御祈祷を受けるのは勿論のこと、ちょうど桜の時期でもあったので、お氣が晴れるだろうとの御配慮でもあった。

その行きがけにお寺に向かう親子の姿があつたのだが、幼い子供が足をくじいてしまつたらしく、親は懸命に子供の足に濡らした布を当てている。それを牛車の中から見た姫様は子供を哀れに思い、従者に腫れを引かせる薬を親子に分け与えるように言った。薬を受け取った親は大変感激し、

「こよみにお優しいお姫様の御父上である中納言様が悪い方であろうはずはない。世間のうわさなど當てにはならない。素晴らしい方々だ。もつたいない、もつたいない」

そう言つて、いつまでも頭を地面にこすりつけていた。そうしてたどり着いたお寺で、姫様は御仏の慈愛について説法を聞くうち、父上の評判や、周りの人間の接し方などに振り回されるよりも、自らの心を穏やかにする事が、巡り巡つて、家の幸せにつながつていいだとお考えになるようになつたのだといふ。

それ以来、姫様は大きなお声を立てて人を威嚇したり、叱りつけるような事のないように、優しく、穏やかに日々を過ごすことになり専念されるようになったのだとか。

私などは金持ちの娘であっても、身分の低さを色々言つ者は正面切つて言つて来るものばかりで、腫れ物に触る扱いも、あてこすりで白い田にさらされたこともない。田舎の人間は噂も嘘も真つ直ぐなものだ。

私は父に甘やかされて我がまま放題だつたし、人の評判で、家の命運が決められてしまう心配もしたことが無い。しかし、高貴な方々ともなればそんな幼い頃から、人の目と家の名誉を意識して暮らしえ続けなければならないのだ。それは一生逃れられない宿命だ。

生涯連れ添うかもしれない結婚のお相手さえも、選ぶ事が出来ない。すべてが決められた人生。

それならばせめて、せめて、召し使える女房達の誠意や、友情だけは本物でありたい。

恋のときめきや、自由は無くとも、穏健で穏やかな結婚生活であつていただきたい。

やすらぎの話を聞くうちに、私は本気で姫君様の健やかな幸せを祈る気持ちになってしまっていた。

その夜私は早くに床についてしまった。おとといからあまりにも

色々な事があり過ぎたし、緊張もつづいていた。なにも身体を動かしていなかった訳でもないのに（むしろ動けない！）心も身体もくたくたになってしまっていた。

だから綿のたっぷりと入った、真新しいふつくらとした夜具の着物を引きかぶつて身体を横たえたとたんに、ぐつすりと眠りこんでしまったようであった。

真夜中過ぎの頃、小さな物音に続いて冷たい隙間風を肩口に感じて私は目を覚ました。

早春の都はまだまだ寒い。田舎の寒さとは違う、ぞつとするような冷気が特有の地形から襲つてくる。だから屋敷の建物は床が高く、御格子と呼ばれる戸を閉めて冷気を防いでいるのだが、何処からか冷たい風が入りこんでいるようだ。私は着物をかぶり直そと寝がえりをうつた。

突然人の気配を感じた。声を立てようとして口をふさがれる。

賊は一人ではない。なぜなら私は一人がかりで担ぎあげられた。一人はふさいだ手を放そとはしない。息が苦しくなった。必死にあがくが一人掛かりではどうすることもできない。

内部に裏切り者がいるわ。

こんな時だというのに、真っ先にその事が頭に浮かんだ。私達がここに移つたその夜に、警備を一層厳しくした中で、二人のの人間が忍びこんでくるなんて、誰か内通者がいなくては不可能なことに

違いない。

息がとにかく苦しくなる。私は口をふさいでいる手に思いつきつ
かみついた。その手が緩み、声を上げる。

「誰か！」

助けてといい終えない内にまた口がふさがれる。いつの間にか開
けられていた御格子をぐぐって外へと連れ出される。風が冷たい。
月もない夜なので辺りは真の闇夜だ。

もう一度かみついてやろうともがいでいると、タッタと足音が聞
こえてきた。

「御免！」

そう、男の叫び声が聞こえたかと思つと、別の男のうめき声がし
て、私の体が自由になつた。

しかしすぐに誰かに抱えられて、屋敷の方へと引き返す。縁に下
ろされて、その前に誰かが立ちはだかり、賊に斬りかかっていく。
人の逃げ出す気配と足音がして、やがて辺りは静けさを取り戻した。

「失礼を承知で乱暴な真似を致しました。申し訳ありませんでした
が、場合が場合でしたので。お怪我は御座いませんでしたか？ 姫
君」

声を聞いて私は慌てていた。そこへ、騒ぎに気付いたやすらぎが
火を持ってやってきた。

私達の姿に光が当たる。康行が呆然と私の顔を見ていた。

「お前は……お前は一体何をやつているんだ?」

康行にかいつまんて説明をすると、いきなり質問された。今、説明したじゃないの。

「若君の前で顔を晒して琴をひいただけでは飽き足らず、姫君になり変わつて大立ち回りをする女なんて、下女でも聞いた事は無いぞ」「失礼ね。普通の下女だったら、こんな事に巻き込まれたりはしないわよ。それに大立ち回りをしたのは康行で私じやないわ」

「そんな話をしているんじゃない。これは女房としての役目を越えている。超え過ぎているだろう。まして三日夜の宴まで入れ代わつたままでいろだなんて、いくら身分が低いとはいあんまりだ。なげ、断らないんだ」

「私が断れば姫様の身が危険なまま、御結婚の邪魔をされてしまうじゃないの。それではお可哀そうよ」

「お可哀そう? お前今、自分がどんな目に会つたのか分かっているのか? 姫君の代わりに連れ去られそうになつたんだぞ。お前がニセモノだと知れたとたんに、殺されていたかもしけれ知らない。人に同情をかけている場合じや無いはずだ。こんなこと今すぐ断るんだ」

「それは無理よ。姫様はどちらにいらつしやるか分からぬし、急に呼び戻すことも出来ないわ。ここに姫様がいらつしやらないと知

られたら、それこそ、どんなことになるか。もう、後戻りはできないの」

「自分の身をさらしてまで、姫君を守りたいと本氣で思つてゐるのか？」

あまりそんな深いところまでは考へていなかつたが、康行に聞いかけられて、私は本氣で姫様を守りたいと覚悟を決めた。

「やうやく

私の覚悟が伝わったのか、康行は黙り込んだ。やすらぎはずつと黙つたまま、私達のやり取りを聞いていた。

「お前も都の人間になつてしまつんだな」
康行はさびしそうに言つた。

「そうよ、私ははずつとそれを望んできた。ただ、それが今、思つていたほど楽しいことではなくなつてしまつたけれど。

「今日は俺がここから離れずに見張つていてやる。明日には増員されるはずだ。お前は安心して眠つていい。ただし、日中は注意しろ。きっと内部に密通者がいる筈だ。それも下女や下人ではなく、お前達女房の中にはいるかも知れない。十分に気をつけろ」

それは私も連れ去られかけた時から考へていた。私も真剣にうなずいた。

「今夜は安心して眠つていい。ゆっくり休め」

康行は珍しく私をいたわる言葉を口にし、私とやすらぎを御格子の開いた所へと連れて行ってくれた。

部屋へ戻るとやすらぎが私の手を握ってきた。

「ありがとうございます。命懸けで姫様を守ると書いてくれて。私もあなたと姫様を命懸けで守るわ」

やすらぎは涙ぐんでいた。やすらぎにとって姫様は生まれた時からお仕えして来た、姉妹以上の大好きな方なのだろう。彼女の必死さが手から伝わってくる。

「一緒に姫様を守り切りましょうね」

私もやすらぎの手を心こめて握り返していた。

身代わりの初夜

翌朝、姫君様の部屋に侵入者があつたことは、屋敷中の話題になつてしまつていた。警備の人数は増員され、庭先にまで、侍や下人達の姿が見られるようになつてゐるらしい。

私はこれを幸いに連れ去られかけた衝撃で、気分を悪くしてして寝所の奥に伏せつてゐる事にしていた。女房達への対応はやすらぎが一手に引き受けてくれる。夜具をかぶつて寝た振りをしながら、私は考えにふけつっていた。

屋敷内に内通者がいる事は疑いようがない。でなければ昨日の鮮やかな手口の説明がつかない。

昨夜の時点で康行は侵入者に気付けなかつた。他の侍や下人達もそうだ。それなのに賊は姫君の寝所にやすやすと侵入してきた。これは身分の低い者が手引きをしたぐらいでは、出来ることではない。

私がいる姫君様のお休みになる場所は、寝所の建物の中でも一層奥まつた所に用意されている。縁に近い庭先の周辺の片方は女房達の宿泊する局が取り囲んでいるし、もう一方は高い塀から林の様な木々に囲まれた奥の庭に面しているので、外部からはかなりの距離がある。しかも今はそのいたるところに侍達が見回つているのだ。

昨夜御格子が開けられたのは女房達の局の近くだつた。女人とはいえ、大勢の人が休んでいる目の前を、まして定期的に見回りがある中を、間隙を突いて寝所の奥まで入つてきたのだ。

御格子はうちから掛金をかける仕組みになつてゐる。それが外さ

れて開けられていた。これは普通に考えて、下男、下女には入れない、寝所の姫君の部屋の内側から、女房の誰かが掛金を外し、賊を招き入れた可能性が高い。

そうなると自分の同僚である女房達が、全て疑いの対象になってしまつ。やすらぎが相手にしている、普段見知った女房達の声を聞きながら、裏切り者はあの人だろうか？　この人だろうか？　と考えるのは気分の良い物ではない。

当然女房達も同じように思つてゐるらしく、寝所の中には重苦しい空気が流れている。

中には私がいれば真っ先に疑つところだつたが、宿下がりしているのでは疑う事が出来ないと、やすらぎにこぼす人までいた。私がない時にはこんな風に噂をしているのかと、腹が立つやら、あきれるやらである。

それを聞き咎めた桜子が私をかばつてくれたりして、ああ、こんな時に人柄というものは分かるものだなあ、なんて思つたりする。

結局その日は何事も起こらず、夜も一晩中警備の侍達の気配といまつの明かりの絶える事のないまま夜明けを迎えた。

夜が明けるといよいよ姫君様のご結婚の日を迎えた。入れ代つている私としては、朝から緊張の真っ只中にいた。

まず、偽物だとバレないよう心を使わなくてはならない。さすがに結婚当日となると、姿は見せないとはいえ様子をうかがう女房達に気取られないように姫様のしぐさや癖を真似ながら気配を漂わ

せなければならない。

中納言様のご挨拶は奥でじつとしたままやすらぎに任せたおけばよかつた。しかし、北の方が見えられると、母子としての振る舞いに気を配らなくてはならない。

出来るだけの演技はしたつもりだが、御簾の向こうではどのよつな気配に感じられたのかヒヤヒヤものだつた。姫の妹君もおこしになり、声を立てずにそつと談笑しているふりをする。二の姫とは初対面だといつのに。

一の姫はおん年十一歳になる少女なので、今度の件は事情を理解できている。だから不安を隠しきることはできず、心細そうな表情をしながらも、姉の無事をしきりに案じ私にお礼を言つてくださつていた。

私はかしこまるにともできず、ただ、うなずきを繰り返すしかなかつた。

そして日が落ちると大将様は約束の時間通りにお見えになられた。当然、そつと忍んでこられることになるので、この部屋の周辺は人払いが行われて、警備も人の気配も薄くなつてしまつ。

賊が狙うには絶好の機会だろつし、大将様がどんな心積りでおこしになるのかも分からぬ。さすがの私もここへきて身代わりになつた事をちょっとだけ後悔してしまつ。

ひつなつたらせめて大将様に言いたい事だけは言わせてもらひつ。

身分が低い者にも、それ相応の誇りがある事を知つていただこう。これだけ大将様の思惑どおりに振り回されたのだから、これ以上いなりになる必要はないはずだ。何が起ころうとも自分の意思だけはきちんと伝えたい。狙われた邸に通うのだからあちらも命懸けかもしれないが、こっちだって一生がかかつてゐるんだから。

忍びやかな人の気配がして、こっちに近付いてきた。大将様だ。私は頭を低くしてかしこまる。

「これはこれは。そんなにかしこまることはありませんよ。今宵、私はあなたの夫としてここに伺つたのですから」

大将様は楽しげにおっしゃるが、こっちはそれどころじゃない。

「おとといの晩、私は姫様の代わりに連れ去られそうになりました。おそらくこの屋敷の中に内通者がいると思われます。大将様も狙われているかもしれません」

「それはあなたもですね。よく、こんな無理な事を引き受け下さいました。まして恐ろしい目にあわれたというのに、あなたは逃げ出しませんにきちんと身代わりの役目を勤めて下さっている。心から感謝していますよ」

「大将様のためではありません。申し訳ございませんが、私は姫君のために今ここにいるのでございます。姫様と大将様が無事に結ばれる事を願つて、この役目を引き受けているのでございます。姫様に見出していただきながらければ私は下働きの下女として、この屋敷の庭先を駆け回つていたことでしょう。ひょっとしたら田舎につき返されて、成り上がり者の娘が馬鹿な夢を見た、と、笑い者になつていたかもしません。姫様あつての私なのです。私は姫様が好き

で、このお邸が好きで、だからこそ、こんな役目を引き受けているのです」

大将様に顔を見られて、中納言様に見下され、仕方なくここにいるのではない。私は自分の意思と、姫様への感謝、もつと言えば、この邸に勤める事が出来て、色々な人達と友情を育む事が出来ている事に感謝しているからこそ、ここにいるのだという事を大将様に知つて頂きたかった。それさえ知つていて頂ければ、この先世間がどう言つてこようが自分の心のうちの誇りは守られるような気がしたのだ。

大将様は私の顔を上げさせ、深くうなずいて下さった。

「あなたには、初めに私が考えていた以上に色々な難題を強いてしまったようです。初め、私が姫の身代わりを考えた時は、妹姫の二の姫や、やすらぎの事を考えました。しかし二の姫では万が一連れ去られでもすれば、今度は中納言家の入質にされてしまう。中納言殿は今、検非違使（現在の警察の様な組織）の強化に積極的で、前の帝に煙たがられている。今度の件もその流れで起こっている事なのです。やすらぎは姫の事を誰よりも思つている乳姉妹だから口外される心配が無い。だからお付きの女房として偽物の姫を守る役目に回つてもらつた方がいい。そんな時に康行からあなたが夜、局の近くで琴を弾いている話を聞いたのです。あなたの人となりは康行から聞いていましたし、裕福な環境で育つたあなたは下手な貧窮した貴人の娘よりも精神的に余裕がある。いささか粗忽な所はおありのようですが」

ここで大将様はクスリと笑みを漏らされる。私が扇を落とした事を思い出したのだろう。

「このよつな方なら、うろたえることなく、事情を呑み込んで下さると私は思ったのです。本来なら昨日で本物の姫と入れ替わっていただくなつもりだったのですが、何故か増築の進捗状況が外部に漏れ出して、前帝の動きが怪しくなってきた。仕方なくあなたには三日夜の宴までここに残つていただく事になつてしまつたのです」

成程。私が今日、ここにいなくてはならなくなつたのは、突発的な事情からだつたのか。それに実際に私は襲われている。大将様のご判断は正しかつたのだろう。

中納言様は私に対して軽侮の念があつた。これは疑いようがない。しかし、大将様の今の様子に私を軽んじられているような気配は感じられない。

「あなたが襲われたと聞いた時は本当に申し訳ないと思いました。てっきり私はあなたが康行やあなたの父親を頼つて逃げていくものと思つていましたし、それも仕方がないと思いました。しかしながらはそうしなかつた。それどころか私の妻になる人のために命を張ると言つて下さつたそうですね。私はどれほどあなたに感謝しているか」

大将様が頭を下げる。

「そんな、もつたいない」

私は本当に恐縮してしまう。正直なところ、この場だけ手をつけられて、御結婚後は捨て置かれるか、最悪、適当な理由をつけられて郷里に返されるかと内心ハラハラしていたのだ。

「これはあなた次第なのですが、こういうことになったのも何かの縁。もしよかつたら私の感謝の気持ちとして、私の妻になっていただけませんか？ あなたのご一族の事は一生面倒見させていただきますよ」

私は目を丸くする。ちょっと待つた。話しがこういう方へ行くとは思っていなかつた。

男君は何人の妻をめどつてもかまわない。もちろん主流の本妻はお一人になるが、社会的地位などの妻も平等に与えられる。正式にお披露目のない愛人や、手近な女房に情けをかける情人とは訳が違う。妻はあくまでも妻なのだ。

だから全ての妻に同じ格式が与えられるので、他の妻の家が良くなり、どうしても足を運べなくなると離婚ということもありえる。そうなつては困るので、夫を通わせる妻の家は邸中を上げて夫をもてなし、世話をがあるのである。

ただ、それだけの経済力をかけて夫の世話をするのだから、夫になる人の身分や出世はそれ相応の物が求められる。身分が低く、出世の目が出ない男君は妻を一人持つのも大変だし、逆に家柄もよく、出世街道まつしげらな殿方は、各家から引く手あまたの申し出がある。

大将様はまぎれもなく後者で、都中の権門の家が狙っている方だ。それに私と大将様とでは身分に大きな開きがある。この場合、たとえ私の家が裕福だといっても、大将様が私の家から経済的援助を求めることは無いだろう。その上で社会的、政治的援助は受ける事が

出来るのだ。

大将様は一族を一生面倒見ると言つた。額面通りに受け取るのならば、たとえ夜がれる事になつても、離婚はせずに私の一族の面倒を見続けて下さるという事になる。女人なら一度は夢見る、大変な名誉だ。

普通なら断らない。一族の事を思うなら、断れない。女の身の大出世だ。私はぼーっとなつてしまつた。

大将様の感謝の念は本物だ。でなければ口が裂けても言つていい言葉じやない。けれど。

私は大将様から視線をそらした。姫君様の調度品が目に入る。そうだ、ここは姫様の寝所なんだ。

「その感謝は姫君様に捧げて下さいませんか？　さつきも申しあげたとおり、私は姫君様のためにここにいるのです。自分の出世のためではありません。そのお気持ちだけで結構です」

私はあらためて頭を深く下げた。さつきは自らの矜持から出した色合いの濃い言葉だったが、今は姫様への想いが言わせた言葉だった。

「姫君には実は了解を得ている。あなたがどれほど命をかけているのか姫君は知つておられる。私は身分がらまだままだ妻が増えしていく。それならば人柄の分からぬ姫よりも、あなたの様な方に感謝の気持ちを伝えたい。それを姫君も理解してくれている。その上での申し出なのです。受けて下さいませんか？」

勝手に話をする事も困る！ 私が妻になれば姫君様は私と
友情を結んで下さるのが難しくなる。いや、あの姫様なら自分のお
苦しみを胸におさめて、私を暖かく見守つて下さるかもしれないが、
私は姫様をそんな立ち場に追いやりたくない！ やすらぎにだつて
顔を合わせる事が出来ない！

大将様は物慣れた様子で私ににじり寄つてこられる。私の袴の裾
を膝で押さえている。普段女房や女君の相手で、この手のしぐさには慣
れていらつしゃるのだろう。私は思わず身を引いてしまった。
それを見た大将様が膝から袴を放す。その拍子に私の懷からこくり
と何かが落ちた。櫛だ。康行が縁に置いて行つた櫛。

私は姫様の御櫛を使うのが申し訳なくて、この櫛を懐に入れていたのだ。中将様はそれをじつと覗になつた。

「康行。どこに隠れている？」

大将様がどこへともなくそり、お声をかけられた。

すると塗籠の中から何と康行が現れた。なんでここにいるのだろう？

「今日の私は振られたようだ。夜が明けるまで部屋を出ることはどうきないが、ここにいる事もばかられる。お前はここで姫君を守つていなさい。私は塗籠で休ませてもらおう」

そう言つて大将様は少し微笑まれながら塗籠の中にこもられてしまつた。

「やすらぎさんが俺を通しててくれた。若君に言わっていたらしい。さすがに今夜は人すくなになつてしまふから、寝所の中で賊が侵入しないか、見張つているように言っていたんだ」
康行はうつむいたままそいつた。

私は顔も上げられずに「そう」とだけ言つた。

「俺は御格子のそばにいる。御簾の中には入らないから、安心してくれ」

安心？ 何が安心だというの？ こんなやり取りの後で、康行に全部聞かれてしまつていて、何処をどう安心しろって言うのよ。私は何故だか泣きたい様な気持ちを抑えるだけで精いっぱいだった。

塗籠の中から時々衣擦れの音が聞こえる。大将様は起きていらつしやるようだ。康行は私に背を向けて御格子の方を見ているらしい。固まつたようにピクリともしない。緊張しているのだろう。

その夜は三人三様が、まんじりともせずに夜を明かした。賊が侵入した気配はないようだった。

夜が明ける頃、大将様は塗籠からお出になられて、康行に寝所から出るように促した。侍が建物の中にいたと知れたら厄介だからだ。中将様ご自身も帰り支度をなされる。康行はやすらぎに掛金を外してもらつた御格子から外へと出でいった。帰り際に大将様がおつしやつた。

「あの櫛は康行からもらつたものですね？」

「……はい」

康行はこの櫛を大将様にお見せして、良いものだといわれたと言つていた。大将様もすぐにお気づきになつた。

「あの男は優しい男です。あなた達は真っ直ぐに目を見て話してお互いを知る事が出来るのですね。私などは女人と目を見かわせれば、そこですべてが決まつてしまつ。そうできなかつたのは、あなたが初めてです」

公達に顔を見せて目を合わせれば、それは互いに関係を結ぶ条件の様なもの。女人は顔を隠すか、全てを受け入れるか一つに一つしか道が無い。それはどれほど不自由な事なんだろう。

「たしかに彼の身分は低いが、彼には馬を育てる才能が飛びぬけている。地元でも馬を売つてそれなりの生活が出来ているはずです。彼もあなたと同じように私のために身体を張つて警護を務めてくれている。彼なら馬の世話だけで、十分暮らせるはずなのだが。彼もあなたと同じなのですよ」

「私と、ですか？」

「ええ、彼も五年ほど前に大納言家に初めて勤めに来ました。馬の事だけでも十分なのに、彼は気の合う私のために、懸命に使って、性に合わぬであろう侍者となつて私を守つてくれています。彼はあなたを昔の自分に重ねてしまい、放つてはおけないのですよ」

「そうか。だからここでの手当てをまるきり私の櫛につき込んだり出来たんだわ。康行は決して経済的に苦しい立場ではないんだ。何度も都に訪れるのは、お金のためだけではなく大将様への友情があるんだわ。私が姫様を気に留めているように、康行は大将様を気に留めているんだ。

「正直、あなた方が私は羨ましくなる事があります。真っ直ぐに見つめあつて、真っ直ぐな言葉をかけあつ。私には望めない事です」
大将様は軽くため息をおつきになつた。

「後で後朝の文を差し上げますが、あなたは読んで下さるでしょうか？」

後朝の文とは、男女が契りを交わした後に贈りあう手紙の事である。本来なら新婚の朝には、当然送りあうのだが、私達はどうすればよいのだろう。勿論、姫様が書き残していかれた儀礼的な文は用意してある。表面上はこれを贈りあわない訳にはいかない。今、大将様がおっしゃっているのは、結婚を示唆された私に対するお文の話だらう。私はこのお話に一言もお返事を差し上げていないので。

「返事を急ぐのはやめましょ。私もあせるつもりはない。では、今宵、またお会いしましょ」

そう言つて大将様は朝靄の立ち込める中に姿を消してしまわれた。

その日、私はぼんやりとまたため息がちに過ごしていた。やすらぎも私に声をかけてはこない。

康行や大将様が出ていく時の様子から、何か察するところがあつたのだろう。私も口を開く気にはとてもなれない。

朝食もろくに取らずにいると、大将様から後朝の文が来た。開くと姫様宛のきちんとしたお文の中から、小さく折りたたまれた、もう一つの文が出て來た。私宛のお文だらう。

「藤なみのまだ咲かぬ夜ほどさす鳴くべき時を今だ知るらむ

万葉の古歌にかけていらっしゃる、歌だつた。

元の歌は、「藤なみの咲きゆく見ればほどさす鳴くべき時に近づ

きにけり」という、古くからの有名な歌だ。藤は「花房」という私の名前を現している。実際私の名前は藤にちなんでつけられている。生まれた時には満開だったそうだ。

ほととぎすは藤に寄り添つて鳴くもの。遠い昔からの取り合わせで、中将様が私に言い寄る様子を現している。しかし、恋の花は昨夜咲くことは無かった。そもそも藤は夏の花。今はまだ春の初めだが、ほととぎすはいつ鳴けばよいのですか？ そんな意味あいの歌だ。

流石に手なれた読みぶり、私の名にかけ、季節をわざとずらしたお歌。筆跡も墨の濃さ、淡さ、かすれ加減まで良く整えられた美しい文字だ。全体に品格が漂っている。私などが太刀打ちできるお歌ではない。

それでもこれだけきちんとしたお歌を大将様は送つて下された。昨夜の言葉はその場の勢いではないとおっしゃつているのだ。これに返事をしないのは、あまりに失礼だろう。仕方なく私も返事を書いた。

「わがやどのいけのふじなみ」

女のかな文字、しかも決して筆跡は美しくない。まして芸術的地位を添えるなんて逆立ちしたつて私にはできない。

だから、せめてやわらかい文字で丁寧に、女の最低限の教養と言われる「古今集」の歌の、はじまりの部分だけを書いた。この後には藤の花が咲いた、いつかは山からほととぎすが鳴きにくるだろう。という意味が続く。あくまでも花が咲けば、という意味も込めて私はその部分をわざと書かずに表現をぼかしたのだ。歌は苦手でもそ

の程度のたしなみはある。大将様ほどの方なら、これで通じるだろ
う。

この文を私も大将様のように姫君の御手紙の中に小さく置んで添
える。奇妙なやり取りだ。

朝食をあまり食べなかつたので、やすらぎが「体によくないから」と、暖かい甘蔓の湯（甘い飲み物）と柑子みかんを用意するよう言つてくれた。暖かい物は心を落ち着けてくれる。

ところが柑子を口にしようとして、指先が思つように動かない。良く見るとやすらぎや他の女房も様子がおかしい。ここに来て私は甘蔓の湯に何かが混ぜられた事に気がついた。身体はすでに軽くしごれていて動かせない。どうやら隙を狙うには警護が厳しくなりすぎで、内通者が思い切つて一服盛つたらしい。油断した。

白昼堂々と、こんな荒っぽい手口に出るとは思つていなかつた。私は前のめりに伏せつたまま動けなくなつてしまい、誰かに大きな布をかぶせられた。どうやら、袋のようだ。そのまましばらくは引きずられ、途中から担ぎあげられる。

外がだんだん騒がしくなる。どうやら下人達が出入りするところまで来たらしい。助けを呼びたいが声が出ない。身体のしびれもひどくなる一方だ。ついには外に連れ出されてしまったようで、物売りの声なども聞こえる。私はしびれる身体を必死に動かし、懐から康行の櫛を出した。

袋の隙間を探り、思い切つて外に放り投げる。地面にカラリとモノの落ちた音がした。私は牛車か何かに荷物のように放りこまれ、だんだん意識が遠くなつていった。

康行。落とした櫛に気付いてくれたら、あんたを少しさは見直すわ。

最後にそんな事を思った。

目が覚めるとひどく頭が痛かった。身体もまだ少ししびれているようだ。薬の影響があるのだろう。身体を起こし、回りを見回すと農作業の小屋の様な所にいる事に気がついた。都からは大分離れてしまつたのだろうか？

反対側に振り向くと、そこに桜子がいた。

「気がついた？ 大丈夫？」

「大丈夫。少し頭が痛むけど。桜子さんも連れてこられたの？」

「そうみたい。気が付いたらここにいたの。ねえ、何故あなたがお屋敷にいたの？ 姫君様はどうしたの？」

そうか、桜子は事情を知らないんだっけ。

「実は中納言様に頼まれて姫様と私は入れ代つていたのよ。姫様が何處にいらっしゃるのかは私も知らないの。知らなくて良かつたわ。こんな事になるのなら」

私は痛む頭を押さえながら答えた。まだ少しほんやりとしている。

「そうだったの。あの、とても申し訳なかつたんだけど、これがあなたの懐から出てきていたの。私、つい読んでしまつて」

桜子は大将様のお歌のお文を手にしていた。櫛を落とそうとした時に出て来てしまつたのだろう。

「このお手つて、もしかして大将様のものじゃないの？ あなた大将様と何かあつたの？」

この状況で隠しても仕方がないだろう。

「私に結婚を申し込まれたの。感謝の気持ちだと言つて下さつて」

桜子が驚いた表情で私を見つめる。そりゃあそだらう。私だって実感がないくらいだ。

「じゃあ、まだあなたには利用価値があるのね」

桜子の様子が変わつた。利用価値？どういふことだらう？

そう思つて桜子の手紙を持つ手を見つめると、その手のひらの傷に気がついた。何かにかみつかれたような……。

私ははつとした。前に連れ去られかけた時に、私は思いつきり相手にかみついた。一人はうめき声で男と分かつたが、あの時もう一人いたはずだ。あの、闇の中にいたのは桜子だつたのか？

「あなたが内通者だつたの？」私は驚いて桜子を見つめていた。

人質

桜子はとつさに手の傷を隠そうとしたが、私の目を見ると「ふつ」とあきらめたような表情をして、私に文を返してきた。

「ついにお気づきになつたのね」「まるでため息のように言う。

「何故あなたが姫様を裏切るような事を……」

私はまだ信じられない。こんなに人が良くて優しい人柄の人気が、自分の主人を裏切るとは思えなかつた。

「あなたには分からないわ。豊かな国で自由に育つた人に私の気持ちは」

桜子は私の前で胸を張るしげさをする。

私には薬の影響が残つていて、身体の自由が利かなかつた。どうしてもうつむきがちになる。

姿勢は人の心に影響する。こんな状況では受けける影響も大きい。私は桜子に支配されてしまつたような錯覚を起こしていた。これも薬の作用なのだろうか？

「あなたは武蔵の国の出だつたわね。山があり、広い平野があり、温暖な気候に恵まれた国。私の暮らした越後とは大違ひだわ。一年の半分近くは雪に閉ざされ、その雪が時には人の暮らす家さえも押しつぶしてしまつ。豊作に恵まれればよいけれど、夏の実りに恵まれなければ長い冬に閉ざされてどうすることもできなくなる国。私の父はそんな国の国司になつた」

桜子は遠い目をして自分の暮らした国を語る。

「本来なら父は若狭のよつなもつと豊かな国の国司になれるはずだった。それなのにあの、帝の急な退位がきっかけで任地が越後に変更されたわ。武藏や相模、東もあらえびすの国といわれているけれども、それより越後はもつと遠い国。そんな国の国司に父は突然据えられてしまったのよ。それでも父は国司としての務めに励んだわ。けれども運が悪いのか、父が赴任した後の越後は凶作が続いてしまった。そして冬には雪に閉じ込められる。私達はどれほど都を恋しく思い、苦しい思いをしたか、あなたには分からない」

桜子は立ち上がり、まだ体の自由が戻りきらない私を見降ろしている。

「私は父の任地が変わったら、都に戻つて結婚することになつた。しかし父は凶作の影響と、その対策に追われてなかなか都には戻れなかつた。その時の越後は飢えと寒さで餓死する者も多かつたから」

桜子は私に意地の悪い視線を送る。

「あなた、知つてる？ 京の街にもたくさんの餓死者がいる事を。あなたは牛車に乗つて都大路を眺めるだけでしょうけれども、その路地を一歩入れば道端にはたくさん子供の死骸が転がっているのよ。そして何日かすると役人達が死骸を集めて鳥野辺で、まとめて焼くの。それも荼毘に伏すんじゃなくて疫病が起こつて高貴な方々につつたりしないように、まるで物のように焼かれるのよ」

桜子は私の顔色が変わることを楽しむように眺めている。普段とは別人の様な顔つき。

「父が私に選んだ結婚の相手は、そんな仕事をしている役人だった。それでもその男はさる高貴なお方にお仕えしていく、前途は有望だつたから父は私にその男との結婚を望んでいたの。ところが父が都に戻れなくなつた事をいい事に、向こうは私よりも家柄のいい姫と結婚してしまつた」

桜子の表情に、一瞬の陰りが浮かぶ。しかしその影はすぐに消え、私を見下す表情に戻る。

「幼い姫様が吉野で子供に情けをかけた話なんて、私から見れば偽善もいいところ。虫唾が走るわ。たまたま姫様の目にとまつただけのその子が良い目を一時見ただけで、日常の中でどれほどの貧しい人たちが死んで行つているか、誰も気に留めずにいるのよ。あなた、誰にも振り返らず、打ち捨てられる気持ちが分かる？　越後に放つておかれてしまつた、私達のような者の気持ちが。なのに役人は威張りかえり、人々は見て見ぬふりをするばかり。中納言様達は、その役人の力をより強くしようとしている。検非違使を増員したり、彼らの地位を上げようとしたりしているの」

桜子の目の色が変わる。私に対しても憎しみをぶつけて来るのだ。

「私が中納言家に勤めに出たのはあなたの様な行儀見習いと違うわ。親に迷惑をかけないように、結婚相手が決まるまで、自分が自立をする為に勤めに出たの。あなた達は都見物の延長の様なものだらうけれど、私は違う。自分で身立て、自らの夫となる人を得るために勤めに出たの。それなのにまあ

桜子は私に返した手紙を睨みつける。

「人によって、運つてこうも違うものなのね。自分の力で生きる他人に、私のような者には誇りを踏みにじられるような事ばかりが起るのに、身分はずつと下でも恵まれて甘やかされてきたあなたのような人に、大将様からのそんなお文が来るなんて。本当に不公平だわ」

「でも、それでも姫君様達には何の罪もないじゃないの。お二人とも『自分が与えられた中で、精いっぱい生きようとしているだけじゃないの』

私は喘ぐように言づ。今や薬の毒毛よりも、桜子の言葉の毒に私は苦しめられていた。

「そうね。姫様達には関係ないこともしれない。それでも私は大納言家と中納言家がこれ以上繋がりを深くして、力をつけていくことが許せないの。彼らが下々の者を見る時はいつも傲慢だわ。前の帝の味方をしたい訳ではないけれど、今の帝や貴族の人たちの鼻を一度は明かしてみたいのよ。この結婚を失敗させて両家に溝を作り、役人ばかりが威張りかえる今の状態を壊してみたい」

思い出す、中納言様が私に入れ替わりを依頼した時の見下した態度。言葉は丁寧であつたが、そこにはインギン無礼な匂いがあつた。きっと下々の誰もが大なり小なり一度はこんな思いを味わっている。だけど

「それは世間へのやつあたりだわ。あなたや前の帝がやっているような事で世の中が変わるとは思えない。もし変わったとしても、今度は帝の首を挿げ替えられるだけで、また、誰かの思うがままの世の中になるだけ。こんなことしても誰も幸せにならないわ。あなたは姫様が不幸になつてもいいというの？」

桜子は私にじっと視線を向ける。そして挑戦的に言ひ。

「私は姫様やあなたの不幸を心から望んでいる。私と同じ苦しみを味わうことをね。あなた、少し言葉に気をつけた方がいいわよ。あなたの命運は、今、私達の手の中に有るんだから」

桜子の目は何処までも冷たい。あの、人の良い笑顔の下にこんな目の色を今まで隠していたのだろうか？

「良かつたわね。あなたにはまだ利用価値があるわ。殺されずには済みそうじやない？ 大将様のお気持ちが本物なら、あなたをこのまま捨て置くことはできないはず。でも、やつぱり初瀬の觀音様くらいには祈つておいた方がいいかもしないわ。高貴な方つて気まぐれな方が多いから」

「私を大将様への人質にするつもり？」

「すぐに殺されなかつただけでもありがたく思つてね。一セの姫君様」

桜子はそう言って小屋の戸を開けて出て行つてしまつ。私は何とか体を引きずるようにしてその戸に向かつて行くが、当然戸には鍵がかけられていた。私はその場に横たわつた。これ以上無駄に体力を消耗できない。

身体のしびれは残っているが、頭はかなりはつきりしてきた。もうしばらく待てばしびれも治まるに違いない。薬の効果は間違いなく薄れてきている。

やすらぎ達も同じ薬に苦しめられているはず。屋敷の中とはいえ、薬の効き方にも個人差があるだらう。やすらぎは大丈夫かしら？ 桜子の考え方には間違っている。これは世の中への仕返しなんかじゃない。自らの不運を嘆き、幸せをつかもうとする努力をあきらめただけの泣きじとでしかない。ただのやつあたりだ。

そうは思う一方で、私は北国の厳しい暮らしを知らない。南国の激しい疫病の襲ってくるさまも、恐ろしい海辺の嵐も、深い雪に閉じ込められる息苦しさも経験したことはない。桜子のような人の、苦しみを理解することは出来ない。

桜子の様な不満を持つ者が、この国にはどれほど多くいるのだろう？その考え方を弱いと切って捨ててよいのだらうか？私は気が弱くなつていく。

いけない。桜子の言葉に呑まれてしまつている。

だんだん身体に力が戻ってきた。しびれも感じなくなつていく。身体の自由を取り戻すと、心の強さも取り戻す事が出来るようだ。そつよ、こんな理不尽な憎しみなんかに負けちゃいけない。

姫様は周りがどうあらうが、優しく生きていく覚悟を決めてらつしやる。世の中にはこんな憎しみの感情が渦巻いている事も、きっと知つていらつしやるのだろう。その姫様を守り続けることをやらぎは覚悟している。大将様だつて自分の出来うる限りの生き方をしてらつしやる。私に感謝もしてくれている。

父は私に愛情を持つて育ててくれた。康行だつて私を気に掛け続けてくれている。桜子にだつてこうした身近な愛情や友情があつたはずなのだ。憎しみでその目を曇らせてしまつただけで。

私は負けない。私を愛してくれる人々がいる限り、つまらない憎しみの悪意になんか負けていられない。

このまま人質として利用されたくなんかない。何とかしてここを抜けだすことは出来ないだろうか？

高い所に小さな窓がある。私はやつと動くようになつた身体を精いっぱい伸ばして、外の様子を見ようとする。

外には見張りがいた。侍崩れのような郎党が一人、扉とこの窓を見張っている。普通の手段では逃げ出せそうにない。周りは広い田園で、外に出てもすぐに身を隠せそうなところは無い。どうしようか？

すると何処からか、『ぐく小さなわやき声が聞こえて来た。

「花房、花房」

私の名前を呼んでいる。

声のする方にそつと近付いて見る。板張りの小屋の、木目の小さ

な節穴から聞こえてくるらしい。

「薬を盛られたそうだな。大丈夫か？」

康行だ。康行の声がする。私は心から安堵した。

「大丈夫よ。よく、ここが解ったわね？」

私も小声でささやき返す。

「あの櫛はお前がわざと落としたんだろう？流石はじゃじゃ馬、こういう時に、はすつこい奴だ。良くやつた。櫛の先に車のあとがあつた。それを馬で追つて来たんだ。お前何とかここから出られないか？」

「馬があるの？ 私も乗せられる？」

「ここの向こうに小さな林がある。馬はそこにつないであるんだ。一人なら十分に乗れるさ」

逃げ切れるかもしれない。心の中に一気に希望が沸いてきた。

「何とかするわ。でも反対側に見張りが二人いるの。一人は気をそらすわ。もう一人は康行で何とかできない？」

「やつてみよう。なるべく騒ぎを起こしたくない。外に出たら林に向かって全力で走るんだ。俺もすぐに追いつくから振り返らずにまっすぐ走るんだぞ」

康行はそういうと、じつと息を殺していた。

約束

私はまた戸口に向かつて行つた。その戸を両手でトントンと叩く。「誰か、誰かいますか？」

なるべくしおらしい声を立てる。少しでも油断を誘わないといけない。

「どうした？」

男の野太い声が返つて来た。

「ひどく気分が悪いんです。お水を飲ませていただけませんか？」

「戸口を開ける訳にはいかない。そのくらい我慢しろ」
男はすぐ答える。

「でも、私、薬を盛られてからずっと気分が悪いんです。のどが渴いて、胸もつかえている。私はまだ人質としての価値があるんでしょう？　私の身に何かあつたらあなたも困るんじゃないの？　お願いです。お水を一杯だけ……」

私はわざと消え入るような声を立てた。

「ちょっと待つていな」

そう言つて男はその場から離れたようだ。代わりにもう一人の男が窓辺から戸口へと移つていく気配がする。女相手でもなかなか油断はしてくれないようだ。

しばらく待つていると戸が開けられて男が木の椀に入つた水を差

しだしてきた。

「今、ここで飲め」

どうやら一人掛かりで見張るつもりらしい。私はゆっくりと水を口に含んだ。

私は途中で椀から口を放すと、着物のひもを緩めて下着と袴だけの姿になる。

「すいし、向こうに向いてもらえませんか？ 胸が苦しいので」

「それはできない。こんなところに連れていられたのが不運と思つてあきらめるんだな」

男一人はかえつてニヤニヤと薄笑いを浮かべている。私はもう一度水を口に含む。

私は顔をあげて男の目に水を吹きかけた。もう一人の男に椀を投げつけると、全力で駆け出した。

私を追いかけようとする男に、康行が飛び出して来てみぞおちに宛て身を食らわすのが見えた。私は林がある方角を確認しようとする。そこにもう一人の男が刀を持って私に斬りかかるうとする。殺しさえしなければ、腕の一本くらい斬り落としても良い氣でいるのだろう。

康行も刀を抜いて男に斬りかかる。私は必死に逃げていく。向こうに林がある事によつやく気がついた。

刀を合わせる音がして思わず振り返る。次の瞬間康行が男に斬りかかっていた。私は目をつむって走り続ける。下着と袴だけなので

身体はだいぶ動かしやすいが、全力で走ることなど普段は無いので、すぐに息が切れて来る。それでも懸命に走るとどうにか林の中にたどり着く事が出来た。康行も追いついてきた。

「無事か？」

康行が聞いてきた。

「ええ、無事よ。……斬ったの？」

私は戸惑つた。康行が人を斬るのをはじめて見てしまった。

「斬った。仕方なかつたんだ。あのままではこっちが危なかつた」

見ると康行は少し震えていた。全身の気が立つたような気配を感じさせている。

「大丈夫なの？ 康行」

「人を斬れば平氣じやいられないさ。俺は度胸がないんでね。しかしこれが俺の仕事だ。大丈夫、心配するな」

そう言つて康行は林の奥から馬を引いてきた。私を抱き上げて乗の手伝ってくれる。

「暖かいのね。馬つて」

こんな時に間が抜けた言葉だとは思つたが、思わず口に登つた。

「生きているんだから当然だ。生き物のぬくもりは心を安らげてくれる。だが、今は気を張つてくれ。大納言家に辿り着かなければならない」

康行も私の後ろに乗り込んだ。すこし、血の匂いがする。返り血だろう。

「子供の頃の願いが叶つたんだ。少し揺れがきついかもしけないが、しつかり掴まつていってくれよ」

そういうが早いが、康行が足を動かしたとたんに、馬は矢のように駆け出していた。

激しく揺れる馬の背で、康行に半ば抱えられるようにしながら私は馬の首にしがみついていた。そして康行が言つた言葉を考える。子供の頃？ 諸い？ 昔、何かあつたつけ？

馬、厩。そうだ、私がほんの小さな頃に子馬の出産を見せてもらった事があった。

私が幼女の頃、子馬が生まれると聞いて私は父にせがんで厩を覗かせてもらつた。ところが腹の子は逆子だつたらしく、母馬は大変な難産になつてしまつた。私は父の腕にしがみついて鬱えながら様子を見ていた。

そうだ、そこに確かに少年がいた。その子は馬の世話をしている下男の子だつたと思う。

「大丈夫だ。父ちゃんは必ず無事に産ませるよ。いつこいつことには慣れているんだ」

そういうながら父親の手伝いをしていたつけ。少年は母馬の腹を

わすつてやつ、父親は出て来た子馬の足を懸命に引っ張つていた。

子馬は無事に生まれ落ち、必死に立ち上がつた。母馬は子馬をずっと舐め続けていた。可愛い子馬だった。

私はその子馬が欲しいと父にせがんだが、この馬は後に都の若君に買われていくのだといわれた。

「こんなこよろよろしてこるの?」

なんだかかわいそづに見えた。

「父ちゃんが育てる馬はみんな立派に育つんだ。この子馬だって一年もすれば大きくて立派な馬になる。それにお前のお父様はお前が馬に乗るよりも、都のお姫様みたいになる方が喜ぶ」

「都のお姫様? 亡くなつたお母様みたいに? でも私は馬に乗つてみたいわ」

けんもほうるな父をあきらめ、私は少年にせがんだ。

「お前は小さすぎて危ないよ。それならお前が大きくなつてお姫様の様になつたら、俺が馬に乗せてやるよ」

「本当? それなら私も都のお姫様になる。そつしたら私に馬を頂戴。この子馬みたいな可愛い馬を」

「お姫様に馬は似合わないよ。その代わりにもつと綺麗なものをやるよ」

「それなら私に櫛を頂戴。お母様の櫛はとっても綺麗なのよ。漆で

綺麗な時絵が書いてあるの。あんな櫛なら私も欲しいわ

「分かったよ。俺が大人になつたら櫛を買つてやる。馬にも乗せてやる。だからこの子馬は若君に譲つてくれ」

「ええ、我慢するわ。でも、櫛も馬に乗せてくれるのも忘れないでね。約束よ」

約束。そうだ、その時少年とかわした約束。今思えば、あの少年は康行ではなかつたか？

そして私は都人になる事を夢見て暮らし、厩に近付くことは無くなつた。少年の事も忘れてしました。もうあれから十年ほど経つだろ？

康行は私に櫛を買つてくれた。馬にも乗せてくれた。私がすっかり忘れていた約束を、康行は果してくれた。

私はお姫様のようではなく、薄汚れた下着姿で、康行は返り血を浴びて異様な状態になつてゐるけれど、それでも遠い日の約束は、今、果たされたんだわ。

馬の首にしがみつきながら、私は康行を仰ぎ見る。真剣な顔で馬を操つてゐる。もう、震えてはいなかつた。

馬はまるで飛ぶように田園の中を駆け抜けていく……

しばらく走り続けると田の前に桂川が見えて来た。意外と都は近かつたようだ。橋を渡ると向こうに馬の集団が見えた。奥には男車の牛車もある。私達の姿を見ると、牛車の中から大将様が顔を出した。

「康行！ 花房は無事か？」

大将様がお声をかける。

康行は慌てて馬から降り、私を抱き下ろしてくれた。そのまま地面にかしこまる。大将様は私の姿を見ると

「おお、無事であったか。康行、よくやつた。花房はこちらの車に乗りなさい。その姿では身体が冷える」

そう言つて私に、自分の着物をはおうせて下さる。

「大丈夫です。それよりも、検非違使の役人に、以前越後の守の娘と結婚話の持ちあがつた方はおられませんか？ 鳥辺野送りにかかる方で」

私は大将様にお聞きした。

「ああ、そういうえば以前そんな話があつたな。たしか私の叔父の元につかえている男だつたと思うが」

「越後の守の娘が内通者でした。彼女の父君が都に戻れなくなり、彼女の結婚もその役人に一方的に流されてしまつたようです。そういった事が重なつて、大納言家や中納言家に恨みを抱いていたようです」

「そうでしたか。これから康行に場所を聞き、あなたをさらつた者

達を取り押さえに行かせます。もう、大丈夫なのですよ。安心なさい」

「違うんです。越後の守の娘は、桜子さんは、ただ、捕まえて処罰を受けるだけではダメなんです。父君が都に戻れなかつた苦しみ、結婚を裏切られ、誇りを踏みにじられた苦しみを、中納言様やその役人に知つていただかなければ、何らかの遺恨をまた誰かにつなげてしまふと思うのです。彼女を処罰しただけでは解決しないのです。彼女のような苦しみを持った人が、きっとほかにもいるんです……」

話しの途中で、私は足元が怪しくなるのを感じた。薬を飲まれ、寒い中を下着姿で走りまわり、馬の背にゆられ続けていた緊張が、緩んできたに違ひなかつた。私はそのまま氣を失つてしまつた。

気が付くと私は中納言家の局の自分の部屋に寝かされていた。そばでやすらぎが見守つてくれたようだ。

「（）気分はどう？　顔色は随分良くなつたみたいだけど」
やすらぎが私のひたいに手を当てて聞いてくれた。

弱ついていた身体を寒風にさらしていいた私は、あの後ひどい熱を出して、一晩中眠つていたらしい。

「姫様の典薬の助（医師と薬剤師を兼ねた役目）が、皆に解毒のお薬を調合して下さつたの。あなたには熱さましの薬も用意して下さつたのよ。今夜には姫様もお戻りになられるわ。何か召しあがる事が出来る？　あなたはあまりお食事もとらずに薬を飲んでしまつたから、一層深く影響を受けてしまつていたの。何か食べれば回復が早まるそうよ」

「そういえば空腹感が襲つて来た。昨日から殆んど物を食べてはいなかつた。私は用意されていた食事をありがたく頂いた。確かに身体は回復しているのが分かる。」

「桜子さんは？　他の一味とともに取り押さえられたのかしら？」

やすらぎの表情が曇る。

「桜子さんは……。自害なさったみたい」

自害！

「検非違使の役人が駆け付けた時にはすでに自分の喉を刺してこぎれていたそうよ。彼女は自分の誇りだけは守り通したかったみたい」

やすらぎの伏せた眼にはうつすらとした涙が光っていた。

桜子以外の一昧は、侍崩れの郎党達と、京わらんべと呼ばれる、ならず者ばかりが捕まつた。

彼らは私の脱ぎ棄てていつた衣を持つて「女房の衣装目当てに誘拐した」と言つてゐるそつだ。検非違使も取りたてて尋問を強いたりはしていないらしい。康行が賊を切り捨てた事さえ、もみ消されていた。

裏では前帝やそれに群がる不遇な貴族達が暗躍しているに違ひないのだが、朝廷内の複雑な勢力関係を皆が気にしてるので（それは表面からでは見通すことはできない）そういうた貴族達に役人が深くかかわることは無い。

ましてや前の帝であらせられた方に、ただ人の役人達が何をできるというのか。結局、真実が世の中に露呈することは無いのだ。桜子は何のために大胆な事を企てた挙句、死なねばならなかつたのだろう？

桜子の自害は私にとつて十分衝撃だつたが、同時に桜子への悔しさがこみ上げてもきた。

もう私が何を思おうとも桜子の心に届くことは無い。

桜子さん。あなたは死ぬべきではなかつた。死んではいけなかつたわ。本当にこの世に恨みがあるのなら。私へのねたみと、憎しみがあるのなら。これじゃ、なにも世の中に届いていないじゃないの。

何故、命あるうちに私にもつとこの世の不幸を知らしめなかつたの？ 大納言様達にはつきりとおっしゃらなかつたの？

しかし私は考え方。私達女人が、本当に男君の方々に物を伝え
る事なんて出来るのだろうか？

もしも本当に桜子さんが、あの検非違使の役人に心の内をぶつけ
るのなら、越後国司の娘として彼の邸に乗り込むしかないだろう。
そうすれば氣のふれた愚かな女が男君の元へ乗り込んだと都中の笑
いものになり、彼女も彼女の一族も、誇りの欠片も失うような事に
なるのかもしぬ。

まして大納言家にいたつては、彼女の一族の存在すら、もみ消し
てしまいかねない。彼らの傲慢な耳には、どんなに私達が声を立て
ても届くことは無いだろ。彼女の胸につかえた心を吐き出すには
あまりにも犠牲が大きすぎるだろ。

御仏は女人は生まれた時から罪を背負つてゐるのだという。その
罪ゆえに自らの心のままに生きることはできないのだとか。そんな
にも罪深い女人を、何故男君は求め、利用しようとするとするのだろう？

桜子さん。あなたは結局この世で自分の心を誰にも伝えることは
できなかつた。私を除いては。

私はあの時あなたを決して忘れない。憎しみをたたえて立ち上
がつたあなたを。私だけはあなたを理解するわ。

それでいいでしょう？

「やすらぎ。今日の合奏の他に、私に独奏で琴を弾かせてもうえな
いかしら？」

私はやすらぎに頼んだ。

熱の下がった私は縁に出て康行と会つた。康行はだまりがちでそ
れでも私に櫛を返してくれる。

「ありがとう。昔の約束を守ってくれて
私は自然に礼が言えた。

「」の後若君に会うそうだな
康行はさびしげな表情で言った。

「ええ。異例な事だけれど、大将様は今朝、こちらに残られたの。
体裁を取り繕うために空の牛車は返したけれど。このあと私と会つ
て、夜には三日夜の宴にお出になられるわ」

「若君の妻になるのか？」

康行は直接的に聞いてきた。その方が康行らしい。

「いいえ。その話はお断りするわ
私は言い切つた。

「無理をする事は無いんだぞ。越後の国司の娘に何を言われたかは
知らないが、お前が若君に認められたのは他でもない。お前の心根
が若君や姫君に通じたからだ。お前は周りに流されるだけの女じや
ない。自分の意思で都に入り、自分の言葉で姫君の心を動かし、女
房になった。そして姫君のために命をかけて、若君の心さえも慮つ

て、敵の手から逃れたんだ。お前は胸を張つていい。これはお前がつかんだ当然の権利だ」

康行はそういった。そう言ってくれた。私の行動を間違いではなかつたと認めてくれた。その気持ちが嬉しい。

「そうかもしれないわね。でも、私は妻の座はいらないわ」

「どうせ、世間はお前を若君の情人として見るようになる。お前は若君と密接に関係したし、昨日は若君も隠し立てすることなく、お前をあつかつた。車に乗るよう指示を出し、御自分の着物を着せかけた。あれですでお前は若君の恋人としてみなされる。お前が何を言おうと世間の目は決まってしまったんだ。だったら妻として認められる方がずっとといはずだ」

それは分かつている。おそらく大将様もそれを承知で私をそつつかつたのだ。やはり女の扱いが巧みでいらっしゃる。まるで詰め碁の様に女人達のいきつく先を決め、追い込んでしまう。

しかしそこに悪意は無いのだろう。むしろ自分の誠意を女人に与える手段だと信じて疑わずにいるに違いないのだ。それが女人にとっては時として傲慢に見えたとしても。

「いいえ、違うの。私は根っからのじやじゃ馬なの。世間の言うとおりになんて生きられないの。身分が低いといわれれば、女房になりたくなるし、田舎者と言わなければ都で暮らしたくなる。

大将様の妻になるのが栄誉だといわれれば、そうはなりたくないが、私は誰の物にもならないわ。私は私。この都で、私は自分の力を試したいのよ。姫様のもとで、どこまで世間に逆らって生きら

れるのか力を出しつくしてみたいの」

「本氣で若智の申し出を断る氣か?」

「本氣も本氣。私には高い身分もない。でも、卑屈になつて誰かの世話にすがりうとも思わない。私は都で一番自由な女になるの」

「そんなか弱い女人の身で、どんな自由が得られるつていうんだ」
康行はあきれ顔だ。

「心の自由よ。本当なら誰もが持つていい自由よ。さつと桜子さんが一番手にしたかったものよ。彼女はあきらめてしまつたけど、私はあきらめない。この心だけは手放さないわ」

「まさか、お前、尼になる気か?」

尼になれば男女の交わりは禁止される。勿論結婚もできないし、親子の情も、友情さえも否定されてしまう。生きながらにしてこの世の人々と縁を切つてしまつ。それは確かに心が自由かもしない。そして孤独だ。

「違うわ。私は俗世に生きたまま、この世を愛したまま、自由に生きるの。私だけの生き方よ」

私は桜子さんは違うやり方で、この世の中に逆らつて見せる。あらためて、そう、決心した。

私は大将様と会つた。扇を使わるのは勿論、几帳を隔てる事さ

えしなかつた。それは私には必要がない。正面から面と向かつて大将様の目を見ていった。

「結婚のお申し込みは、この場でお断りをせて頂きます」

「私は歌は似合わない。はしたなくともいい。田舎くさくてもかまわない。私は自由だ。」

「大将様のお気持ちはとてもうれしいけれど、私は妻にはなれません。たとえ姫様がいらっしゃらなかつたとしても」

大将様は少し微笑まれながら

「そう、おっしゃるんぢやないかと思いましたよ」

と言つて、私に文を差し出した。良く見ると私が大将様にお送りした文だった。

「これはあなたにお返ししましよう。ほととぎすは藤に鳴く時を聞いたりしてはいけなかつた。しかし私はあなたをあきらめませんよ。あなたの心の池を波立たせるまで、氣長に構える事にしましょう。それまでは私達には美しい友情が一番似つかわしい。しかし康行には負けません。薄衣一枚のあなたを抱きかかるような真似は一度と彼にはさせませんから」

そう言つてにっこりなさる。

「私もあのお文をお返しします」

私は懐から文を出そうとしたが

「それには及びません。いつか私はあなたの花を開かせることが出来るかもしねない。それまで楽しみにとつておいてください」

大将様は強気な、少しいたずらっぽい笑顔をお見せになった。

「今宵の琴は、お一人のために心をこめて引かせて頂きます」

私はそう、はぐらかした。

寝所のひさしの方が騒がしくなつてきた。男車がお着きになると
いつのである。どなただろう?

「ああ、お着きになつたようですね」

そう言つて大将様は立ち上がる。皆がひさしへと向かつて行く。
何故か中納言様や、北の方までもがお車を出迎えた。

良く見ると、それは大将様のお車だつた。見慣れたお車の中から
現れたのは、見知つた上?達と姫様だつた。今朝お返しになつた車
に姫様がお乗りになつていたといふことは……。

「そうですよ。姫君は大納言家にいらしたのです。変な所にかくま
われるよりは、よほど安全だらうと思ってね」

大将様は私に説明なさつた。

ああ、お二人はすでに真の御夫婦でいられたのか。だから大将様
は私の事を姫様に御相談出来たんだ。姫様も今までの一部始終を全
て知つてらつしやるんだわ。

大将様はお車に近づくと、姫様を両手で抱きあげて差し上げた。
これは本来、帝の御皇女様が貴族の家に御降嫁される時に行うこと
である。大将様は姫様をそれほど特別にあつかつて下さつたのだ。
中納言様などは「おお」と声を洩らされたし北の方にいたつては涙
をこぼしていらっしゃった。

私は頭を下げながらも思つてしまつ。まったく大将様は女人の扱いに長けていらっしゃるんだから。

一心地つくと姫様が、私をお呼びになつた。

「あなたには本当につらい思いをさせましたね。桜子はあなたと同室だったのでしょうか？」

やはり全てを存じているようだ。

「桜子さんは、私たち女人の水鏡だったのでしょうか」私は答えた。

「あの人は、私達の不満や苦惱、戸惑いを映してみせる水のような人でした。そして私はそれを覗いてしまいました。でもそれはけして真実だけではありませんでした。彼女の心は波打っていて、その姿は歪んでいましたから」

「あなたにはそれが分かるのね。あなたは素晴らしい人だわ。私はあなたに何をして差し上げればいいのかしら?」

私はただ一つ、本当に欲しい物を答えた。

「私が欲しい物は、一つだけ。心の自由で御座います
姫様には伝わるのであろうか?この思いが。

三日夜

三日夜の宴は華やかに行われた。数々の「駄走」が用意され、女房達は華やかに着飾り、従者や、下男、下女にいたるまでが振る舞い酒に酔っていた。

室内は美しく飾られ、大勢の貴人たちが酒を酌み交わしている。この場にふさわしい晴れの歌や詩が詠まれ、それに合わせて管弦の調べが奏でられる。宴もたけなわだ。

続いて女人の琵琶や琴が合奏され、私も皆と音を合わせていく。そしてやすらぎとの合奏が続いた。

そして私の独奏となる。大将様と姫君様の許可を貰つての演奏だ。私はこのためにここにいるのだ。

初めの音には自分の心を乗せた。軽やかに、一つ調子に。都への憧れ、様々な出会いがもたらしたときめき、都のにぎわい。

だんだん音は穏やかになる。姫様の優雅な御様子、結ばれる友情、穏やかな日々。優しい調べのうちに時折入る穏やかなならざる音。桜子の隠された心。

音が変わる。激しく、強く。桜子の苦しみ、悲しみ、怒り、そして、求め続けた思い。琴の弦が切れんばかりに私は奏でる。私に向かれた憎しみを奏で続ける。

人々が息をのむのが分かる。衣はずれ、髪が乱れようとも私は全

身で弾き続ける。誰もが耳を傾けている。

やがて音は清浄なものに変わる。弱く、たどたどしいが、細やかな調べ。何かを切々と求める調べだ。

そして音はたおやかに初めの音へと帰っていく。軽やかで一つ調子な音。だが、初めとは明らかに違った印象を与えてくるであろう。私はそっと、最後の弦をはじいて演奏を終えた。

誰もがため息をつき、やぞめくような声を漏らしていた。きっと伝わった。桜子の心は今ここで蘇り、終息を迎えたのだ。私が出来ることはここまで。後はそれぞれの心の中にこの音は生き続けてくれるだらう。

宴はまた晴れやかな華やかさに満ちていく。桜子の憎しみはそこにはもうない。

宴の終わりに私は姫様に呼びとめられた。

「花房。私はあなたに何をすればよいのか分かりました。あなたはすばらしい演奏家ね。奏で続けなさい。続けなくてはならないわ。あなたの琴は百の言葉に勝るとも劣らないわ。あなたは私達の大切な何かを伝える事が出来る。あなたの心は自由でなくてはならない。あなたの琴は自由なままに奏でられなくてはならない。私はそれを守り続けましょう。あなたは奏で続けるのよ」

伝わった。少なくとも、姫様には私の思いが今はつきひとつ伝えられた。これこそが私の願つところだった。

「奏で続けましょ。一人でも多くの人の心に届くよ」

女人の言葉は世の人々に届けることは難しい。だから、心搖さぶられる歌は流行歌として伝え続けられていく。

私は琴の音でそれを伝えよ。それを伝えられる心を待ち続けていよう。こつでも奏でられるように。

宴が済むと自分の局へと私は戻った。桜子がいなくなつたので今では一人部屋になつてしまつた。何だか部屋ががらんとして見える。

ふと足元を見ると、戸口に近くに手折られた咲いたばかりの白い梅と、折りたたまれたみちのく紙があつた。手紙だろうか？

普通、女人に贈られる手紙はうすようと呼ばれる、薄く、淡い色の付いた美しい和紙が使われる。真っ白な厚手のごわごわしたみちのく紙で手紙がよこされることは無い。開いて見ると力が入り過ぎて、やたら太いばかりの文字が飛び込んできた。こんな手紙をよこすのは康行しか思い浮かばない。

中には歌が書かれていた。あんなに苦手なはずの歌が。

「我が駒が足を止めたる琴の音は初花よりも深く匂へり
いい演奏だつた。良くやつた。

真つ直ぐでひねりのない、康行らしい歌だと思つた。私の琴はこの梅の香よりも深みがあるらしい。

おそらく康行の居る所にまで琴の音は届いていたのだろう。私の演奏はよほど良かつたらしい。私は一人、笑みをこぼした。一人部屋の虚無感が少し和らいだ気がする。康行なりに氣を使つたのだろう。私も返歌を書いた。

「みちのくの ゆきとみまがう しらうめの かおりたつよに こ
ころなぐさむ」

今度の手紙はつすように書いてね。

みちのく紙なんかに和歌を書いてしまう康行に、ちょっとぴり皮肉を込めたのは照れ隠し。康行はこれからも私に手紙を書いてくれるだろうか？ 会つた方が早いと、また縁に近寄つて、私を呼びとめるだろうか？

散々な目にも会つたけれど、都暮らしも悪くは無いわ。私は梅の花を眺めながらやう思つていた。

翌日、康行は「機嫌斜めだった。彼にしてみれば歌に花を添えて人に贈るなんて、一世一代の決心がいる事だったようだ。

「お前は本当に何にも分かつちゃいないんだな。俺みたいな男が雅やかな真似なんか出来る訳がないんだ。もう一度と歌なんか送るもんか。どうせ若君と比べられるのがオチだ」

そう言つてすっかりむくれてしまつ。

それを見て私は逆に「機嫌になつてしまつ。知つてるわ、そのくらい。私が大将様からお歌を送られているのが気になつて、わざわざ不慣れな歌を読んだのよね。だから私は嬉しくて、次の手紙も書いてほしいと暗にほのめかしたのだけれど、康行は気付いているのかどうか？」

「ニヤニヤして、何を考えている？」

そんな事言える訳ないじやないの。

「別に。あんたの歌の読みぶりをちょっと想い出しただけよ」

「もう絶対に歌なんか送らないからなー」

「怒らないでよ康行。あの歌はいい歌だったわ。ありがとう、私の琴を褒めてくれて」

「ふん、歌なんか書かなくてもこいつやつて言葉でかわした方がずっと手取り早いや。都のやり方は性に合わない」

「そうね。本当にそつだと思う。でも、都で暮らす女人には、自分の意思を伝えるためには、こんな方法しかないんだわ。歌を歌い、琴を奏で、しぐさ一つでものを伝える。私はそんな世界で、琴の音一つで立ち向かおうとしているんだわ。それは苦しいことかもしれないけれど、康行や、姫様、やすらぎ、大将様が見守っていてくれれば、勇気を出してやつていけそうな気がする。」

「康行。私、都で生きるわ。どこまで頑張れるか分からなければ、

姫君様のもとで、粘れるだけ粘つてみる。当分郷里には帰れないわ。
あんたはもうすぐ馬の世話に戻るんでしょう、お父様達に伝えてね。
私はここで生きていけるって」

康行はむくれ顔を少しだけゆるめて、じらうつとうなづいた。

「俺もすぐに都に戻るさ。こんなじゃじゃ馬危なつかしくてほっこりするもんか。若君にだつて気をつけろ。あれでなかなかお人の悪いところもあるんだからな」

そう言つて康行は侍所へと帰つていぐ。

今度会つ時、私は、都に染まらずにいられるだろつか？

染まらぬように精いっぱい逆らつて生きていきたいと思つたが。

私はそう思いながら康行の背中を見送つた。

姫様の三日夜の宴からふた月。私の事は、すでに都中の話題になつてしまつてゐる。

中納言家のとんでもない、やんちゃ女房と言えば、私の事。あるいはこの春の除目で近衛の大将に御出世されたばかりの、大納言家のじ長男にまとわりついた、たちの悪い女君、と言つたところか。

そう言われても仕方がない。この三カ月は、御世辞にも平穏無事な日々だつたとは言えなかつたのだから。

大将様との事だつて、世間が言うよつや仲になつた事なんてない。たつた一度、お歌をいただいただけだ。

それにしてもこのふた月の間、都人の口さがのない事と言つたら！噂話の質でいつたら、故郷の武藏の方がよつぱりマシだつた。

初め、私はかの、悪評高い前帝一派にさらわれた悲劇の女房として持ち上げられたらしい。実際、それは事実だし。

問題はその後だ。私は大将様と、姫君様のご婚礼の三日夜の宴で琴を弾いたのだが、かなり、斬新で、独創的な弾き方をした。全身で、感情をこめて、髪が乱れよつとも、裳が、ずれ落ちよつともかまわず弾いた。

これに都人の意見は真つ一つに分かれたらしい。

これまでに誰も聞いた事のない、初めての調子、初めての音色。

天女が弾く虹の琴のようだと言つ、称賛の声。

そして、心を乱す、乱暴で、独りよがりで、もののがついて人を惑わしているようだという、非難の声。

そんな声が渦巻く中で、私は思い切った行動に出た。わが身を隠す事をやめたのだ。

貴人に仕える女房と言つものは、屋根の下で暮らし、邸の外の者にはなるべく姿を見せず、御簾の中に几帳を立てて、その影に扇で顔を隠して暮らすのが、しとやかで恥じらいのある生き方だと世間では言われている。特に都では。

しかし私はそれを良しとしたくなかった。その考え方を否定して生きる覚悟を決めた。堂々と顔をさらけ出した。

当然それは、あつという間に噂となつて広まつた。私のそれまでの行動にも尾ひれがついた。

実は私はさらわれたのではなく、自ら前帝達に近づき、薄衣一枚の姿で誘惑して金品をだまし取つていただとか、本当は姫様を恨んでいて、しびれ薬を盛るうとしたとか、大将様に姫君様の悪口を吹きこんでいるとか。

しまいには、あの、宴で琴を弾いた時は、天岩戸にこもったアマテラスを誘うのに、胸元を広げて踊り狂つた浮かれた女神のように、半裸になつて弾いていたとまで言わてしまつてゐる。

なんでこんなに言いたい放題言われるのかと言えば、なんてことない、私の父の身分が低いからだろう。

人の噂をある程度信じるなら、私なんかよりも凄い事をしている女房なんていっぱいいる。

実家に金銭的な余裕がなければ、自ら儲け話を振りまいて、貧乏公家に金を貸して蓄えを増やしている人もいるらしいし、地方の受領に情を通じて経済的に援助を受けている人もいるらしい。現実問題として、女房暮らしは華やかな分手当もいいが、支出も結構かかるのだ。

それまで私は身分は低いが、金には困らない父のおかげで、そういうことにはまるで疎かだったのだが、都暮らし가長くなるにつれ、そういう裏事情も理解できるようになってきた。

そんな都で、上京したての小娘が、親の金の力で女房に成り上がり、雲の上人であるはずの姫君様のそばにお仕えし、その、背の君である大将様を恋人にして（これは誤解なのだが）一人の後ろ盾をいい事に、好き勝手にふるまっているのだから、そりやあ、恨みもねたみも買って当然なんだろう。

だから私の噂が、都中に広がつても仕方のないことだと思つていたし、姫君様と大将様の後ろ盾も私は大いに利用させてもらつて、堂々と顔をさらしたまま、姫様のお世話をし、暮らしを整えて差し上げ、琴を弾きなうしていた。

ところが、まさかその噂が、今上の帝のおられる、九重の宮中のかなた、御所の奥深い御簾のうちにまで届いて、ようとは思つても

みないでいたのだ。

その夜、大納言の長男である近衛の大将は、久しぶりに御所の宿直をしていた。

中納言家の一の姉と結婚したばかりの新婚と言う事で、しばらくの間は日を開けずに入納言家に通っていたため、帝の身をお守りする近衛の大将と言う身分に出世したばかりだったにもかかわらず、ふた月の間ほど宿直は免除してもらっていたのだ。

大将はしばらく、私的な時間に主上とお目にかかる事もなかつたので、その大将が宿直しているとお聞きになると、主上（帝）は早速、大将を碁のお相手にとお呼びになられた。

前帝は「訳あり」で失脚なされているので、今上の帝はまだ十九とお若くていらつしゃつた。

だから、年の近い一つ下の大将などは、御公務から離れられると良い話し相手になるらしく、管弦の遊びのお相手や、宿直の夜の話し相手などには、よくお呼びつけになるのだ。今夜は久しぶりの碁のお相手らしい。

大将の方でも、主上からのお誘いは嬉しかった。碁のお相手も楽しみである。

大将は幼い時から主上の元に童殿として、主上とともに手習いを受けて育っていた。

おそらく父である大納言が、前帝よりも当時東宮だった主上に目をつけて、自分を親しい位置に据えたに違いない。実際、そのおかげで大将は今の地位を手に入れている。

それはさておき、幼い頃からまるで乳兄弟か、幼馴染のように育った主上と過ごす時間は、大将にとっても楽しいものがある。身分は違えど、腹を割った親友に会うような心地さえするのだ。

貴族たちの世界はとてもせまい。まして上流ともなれば、付き合いのある人間は、皆、血縁が誰かに突き当たってしまうほど世間が狭い。その中でさまざまに接するのは、むしろ召し使う身分の下の人間たちだ。

貴族の生活とは昼夜問わず、人々に囲まれた生活でもあるのだろう。人がいなければ成り立たないのだから。

彼らは自分達の地位を守るためにも、長年慣れ親しんでしまう心情的にも、召し使う者たちを懸命に養っていく。

召し使われる者たちも、そんな彼らに心を寄せし、まさに手足となつて働いている。

実生活ではあまり顔も合わせる事もなく、関係も希薄になりがちな親類縁者や、離れて暮らす父、母、兄弟など、政治的な風向き一つでいつ、心が変化するか分からない同じ血筋の人間よりも、時として、より深いきずなが生まれることだって少なくは無い。

恋や友情だって当然生まれる。主従関係とは奥の深い物なのだ。

それはたとえ、帝と臣下であつても変わりは無いらしく、主上と大将の関係は、まさにそいつたものであるらしかった。要するに二人は気が合うのだ。

そんな気の合つ主上と、大将は久しぶりの碁で主上に押し気味の展開をしていた。遊びで花は持たせない。それが主上との、昔からの約束事である。

「つづむ。腕をあげたな。こここの隅を取られたのは痛かつた。こっちの地を取られまいとムキになり過ぎたかな？」

「婿入り先の中納言殿は碁の名手でいらっしゃいますから。お相手をしていろいろうちに、私の腕も上がつたよつでござります」

「なんだ。宿直もせずに碁の特訓をしていたのか？　これではかなわぬはずだ。それでは夫の務めも果たしているか分からなくな」

主上は負けを認めて碁石を器に戻しながら笑つた。

「新婚と申しましても、妻はまだ、十五で御座います。まだまだ形ばかりで、子供の遊びのようなものですので、中納言殿と碁を打ちましたり、女房達に話し相手になつてもらつてているのですよ」

大将がそういうと、主上がまるで待ち構えてでもいたかのように視線を合わせて来た。なんだ？

「そうそう、中納言家の女房と言えば、大将は早速、お気に入りの女房を見つけたそうじゃないか。まだ新婚だというのに、偉く手回しが早い事だ」

主上はそつからかつて笑われる。

花房の事か。これはちょっと厄介だ。普通の女房を落とした後なら戯れ話を主上と楽しくできるところだが、花房は事情が違う。こんなところにまで噂が広まっているとは思わなかつた。

「別に手などまわしていませんよ。実務的なやり取りなどを言付かつてもらつていい、普通の女房の一人です」

「普通かな？ 何でも大変なやんぢやぶりで、顔も隠さずに歩くそではないか。しかもたいそう面白い琴の弾き方をするのだらう？」

噂はどの辺までねじれて伝わつているのだろう？ あまり品のない事もいいかねる。

「それほどでもありませんでしたよ。やや、斬新ではありましたが、美しい、良い音色で御座いました」

「良い音色か。本当は大将が手とり足とり教えたのではないか？ 衣を着せかけた仲だそうじやないか」

大将は返事もせずに、曖昧な笑い方をした。自分は宮中では名うての色事師、女人相手ならそんじよそちらの男達には負けないと自負がある。そういう自分が結婚まで持ち出したのに、身分の低い、わずか十六の娘に袖にされたとは絶対に知られたくなどない。あまり突つ込まれたくない話だ。

「お前は笛が得意だが、その琴の音と合わせた事はあるのか？」

「いいえ、そのような機会がありませんので
大将はなるべくそつけなく答えた。

「それはもつたいたいないな。私はその琴の音と、お前の笛を合わせた演奏を、ぜひ、聞いて見たくなつた。今度、後宮で女雅樂の演奏をしたいと思つてゐるのだ。その、中納言家の女房も殿上させて、お前の笛と合わせてみよう」

主上は好奇心丸出しで、面白がつておひしゃつた。

これは厄介な事になつたと、大将は心の中で歯がみする。

好奇心

主上のお戯れに、大将はやせうつとうじをを感じた。本当のところ、花房を宮中に連れて来たくはないのだ。

まさか花房が自分の顔を潰すような事は無いのだろうが、小娘に氣を回す姿を主上に勘づかれたくもない。

それに自分が花房に興味を持ったのは、主上と同じくもともとただ的好奇心からだった。

金持ちとはいえ極端に身分が低い父を持つ娘が、大胆にも中納言家に乗り込んで、一の姫の最もそばに仕える身となっている。しかも姫のお気に入り。さらには琴の名手だという。これだけでも好奇心をそられた。

さらに、馬の世話を任せている朴念仁な康行が、その少女の行動に振り回されている。目が離せず、気がそらせず、わずかな事でもうろたえているのが分かった。これは面白そうな娘だ。

実際に会つてみると、田舎者らしく、粗忽で無遠慮で気が強い、そのくせ、おおらかで、慕わしそうな、明るく人を引き付ける、意志の強さを持つた娘だった。

女君と呼ぶには、まだ幼さが残るような娘なのに、明るい何かを一つ信じ、それを真つ直ぐに貫こうとする強い輝きが感じられる。そこには不思議な信頼感があった。

役目がら、宮中にいると、沢山の女房達に囲まれている大将としては、ちょっとした恋のやり取りは日常生活のうちだった。

若い女君には自分の寛容さと大胆さを見せつけて、華麗な歌を送つては時に冷たく、時に情熱的にふるまつて見せる。年上には少し背伸びをしているように見せ、そのくせたどたどしい歌を細やかに、まめまめしく送つては、丁寧な気遣いを見せたり、甘えてみたりする。

そうすると女君たちは、自分との程よい距離感を高く見つけ出して、自分をくつろがせてくれたり、勇気づけてくれたりする。田上の方々のいる席で、さりげなく褒めてくれたり、話がまとまりやすいように助けてくれる事もある。

朝廷では正論を交わして、自らの意見を通さなくては潰されてしまう恐れがあるが、後宮の行事や、私的な宴の席では、若い自分はあまり強くものを言つ訳にもいかない。そんな時に自分に有利な雰囲気を作り出してくれる女君たちの存在は、大将にとっては必要不可欠だった。

そんな暮らし方をして来た大将に、信頼感を寄せられそうと思わせる少女。その真っ直ぐな気性は都の女君には無いものだった。

何もかもに恵まれて見える大将にも、苦悩はある。父親の作り上げた地位に対する重圧だ。

自分は長男である以上、父の作り上げて来た現在の権力を、受け継がなくてはならない。自分達の一族で、都を牛耳続けるのが、我々の悲願だ。自分はその中心とならなくてはいけない。

そのために、幼い頃から努力はして来た。人に認められるようこそ、遠い大国の最新の政事を学び、これまでの朝廷の出来事を学び、季節の行事や、管弦の遊びにすら、手を抜かなかつた。

そうやって自分を固めた大将が、何よりも必要としているのは信頼して話す事が出来る、身近な人物だ。

主上は御信頼申し上げている。身分がら御自分の思うようにならぬ事も多いだろうが、それでも大将の事を全力で守ろうとして下さるに違いないと、大将は信じている。

父もおそらくはそうであろう。長男の自分への信頼は、他の兄弟や役人たちよりは持つて下さっているようだ。当然、生みの母からの愛も感じてはいる。

では他に？ と、考えると、乳兄弟と、康行ぐらいしか思い当たらない。他の家来たちもそれなりには信用しているが、安心して信頼できるかと言えば、物騒な今時のこと、多少の不安が付きまとつてしまつ。

それなのに、花房には信頼できそうだといつ勘が働いたのだ。

花房を妻にしても良いと思つたのには、勿論、一の姫を守ろうとする心根に対する礼の気持ちもあつたが、これからも信頼を寄せられそうな女君と云つ、心づもりがあつたからだつた。だから、彼女には自分が与えうる、最大限の条件を告げたのだが、何と、断られてしまった。そんな予感はあつたのだが。

容姿にも、恋の手管にも自信はあった。まして、最良の条件を告げたはずだった。

やはりこれは普通の女君ではなかつた。しかも、我々の顔を立て、一の姫の命を守りつゝある、物怖じをしない女人。

まだ年若いといつて、何といつ手ごたえだらう。身分はいやしくとも、この真っ直ぐさ、この自尊心の高さは、宮中の女官たちにも、決して引けを取ることはあるまい。

これほどの手ごたえ、これほどの矜持。これは強引には奪えない。そんな事をすれば、彼女の最も素晴らしい部分を失つてしまふだろう。

しかも彼女は康行を意識している。彼が送つた櫛をその身から離さずにつる。悔しいが、彼女にとって私は康行と同列、いや、もしかしたらその下に位置しているのかもしれない。彼女の心のはかりにかけられれば、身分など何の役にも立たない。花房とはそういう女君なのだ。

その花房に、主上は好奇心を向けられた。お会いになれば、彼女の持つ、独特の何かに気付かれるかもしれない。自分がそこに太刀打ちできずにつるこにも、ましてあの琴の音を聞けば……。

大将は気が氣ではなかつたのだ。

「その女房は身内を頼つて上京しているのか？」

主上は脇息に持たれながら、のんびりと聞いてきた。

「母親の妹が、御所勤めをしているそ�で『」ぞ』います。梅壺の更衣につかえる女房で、命婦と呼ばれているそ�です」

「梅壺か。しばらく足を運んでいなかつたな。女官に言つて、その命婦とやらに話を通しておこいつ。女雅楽まではまだ、十日あまりある。その女房にはそれまで梅壺に滞在させるがいい」

「本当にお呼びになるおつもりですか?」

大将は未練がましく聞いた。

「なんだ? 大将はいくらでも聞ける琴だらうが、私はこうでもしなければ聞けないといふのに、嫌がるのか? これは余計に聞きたくなるな」

「彼女の身分では、役人の許可が下りないので?」

「親はともあれ、本人は今、中納言家の女房だ。お前の後ろ盾もある。そういうことはお前の方が得意だらう。その、命婦の身の回りを世話する者として、宮中にあげればよい。雅楽の日には私が呼ぶ」
そういうて主上はすっかりその気になつてしまわれた。こうなると、大将は花房を宮中に上げない訳にはいかない。

「お前も笛の練習をしておけよ。女君の前で恥はかきたくあるまい」
そういうて主上は楽しげに笑われた。

いつものように大将様が姫君様の寝所にいらっしゃった晩に、私は姫様がたの御前に呼ばれた。いつものようにお一人お世話をしようとしたら、大将様がお話があるとおっしゃった。

「実はお前に宮中に上がつて欲しいのだ」

あまりの急な話に私はピンとこなかつた。宮中？　あの、御所の？　そばにいたやすらぎさえもが動きを止めた。

大将様は事の次第をかいづまんで説明された。私の噂が、そんなところにまで伝わっているとは思わなかつたので、私もびっくりしてしまつ。

「お前の叔母には明日、宿下がりをさせるから、お前の叔母のもとで支度を整えるといい。後宮の中の事は叔母が教えてくれるだろう。私も決して詳しくは無いのでね」

大将様は淡々とあつしやるが、私にとっては一大事だ。ただ人の中でもいやしい私が、後宮に上がつて琴を弾く？

私のような者にとつては御所は天の上にも等しい場所だ。ましてその奥深くの後宮なんて、いくら身内が勤めているとはいえ、まるで別世界だとばかり思つていた。上がるどころか、門前に近づく事も恐れ多いと思つているのに。

「私と中納言殿が後ろ盾になつてているのだ。お前は余計な事は気にせずに、と言つても、お前が人目を気にしないのはいつもの事だが、思うがままに琴を弾いてくれ。主上もお喜びになるだろう」

そういう噂を耳にしての、所望じや、どのくらい眞面目に聞いてもらえるか分からなければ、まさか帝の命を断る訳にもいかない。あんまり恐れ多すぎると。

そんな訳で私は全くの突然に、御所に上がる事になってしまった。これで世の人々は、一層私の噂を面白おかしく広めてくれるんだろうなあ。

「あなたのお父様に、雅楽の用の衣裳と身の回りの物をお願いしなければなりませんね」

叔母は突然の事につぶたえながらも、私の仕度を手伝ってくれた。

「」衣裳は前日までに役人の手元に届くよう手配しました。お化粧道具は今の物で事足りると思いますよ。あなたの身元を証明する書面は、明日、御所で、役人に渡しますから、忘れないようにね」

さすがに普段御所に勤めているだけの事はあつて、速やかに支度が整つて行く。

「こんな突然の事に、色々手をまわしていただけて」

私は叔母に礼を言おうとしたが、叔母がさえぎった。

「いいえ、とんでもないわ。これは私がお仕えする、更衣様にとっても、大切な機会になるの。ここ最近は中宮様（皇后）のご威勢がとても強くて、他の女御様は皆、かすみがちだつたし、まして更衣でしかないうちのお姫様には、長らくお渡りもなかつたのよ。あな

たの事がきっかけになつて主上が梅壺にも、こまめに通われるようになつて下されば、こんな目出たい事は無いわ。あなたには是非、頑張つてもりわないと」

頑張れって、言われたつて、あちらは尊話的好奇心で、私を見せるのよつに考へてゐつて、このに、私が何を頑張ればいいのやう。そんな期待を背負わされても困るんだけど。

そうは思つたが、お世話になつて、以上口に出せず、私は叔母に言われるがままにあれこれと準備を整えていった。

正直、話を聞いた時は「御所つてどんなところだらう?」と、こつちの好奇心も搔き立てられたが、叔母にいきなり妍を競う話を聞かされて、ああ、またそういう世界が見えてしまつのかと、夢が一つ壊れた氣分がしている。

果して私は御所で、いつたい何を見せつけられるのだろうか?

御所

叔母に連れられて初めて訪れた御所は、ただただ、広いところだった。新参者が一人で入つたりしたら、間違いなく迷つて出られなくなつてしまいそう。

中納言家も大きなお屋敷だし、大納言家も外から見ると、塀がどこまでも果てなく続くよつな、広大なお屋敷だ。

ところが御所となると、もうこれは町が一つ、いや、三つ四つはあるのと同じで、そういう部分では大納言家にも似ているのだが、中に、古木がたくさん見受けられて、まるで森のよつなところが沢山ある。

庭の一つ一つも大きく広くて、その中に巨大な建物が、いくつも連なつてゐるのだ。女車の中で叔母が指さす。

「紫宸殿は、国の政事が行われている場所よ。帝の詔もここで下されるの」

牛車は奥へと入つていく。

「ほら、ここが主上がお住まいになられている清涼殿よ。向こうに女御様方が暮らすそれぞれの御殿が見えるでしょう？それから梨壺、桐壺、梅壺」

叔母は次々と案内してくれるが、私は御所の巨大さに呑まれて、まるで耳には入っていない。

それにここはすべてが古めかしい。京の都が作られてから、ここ

は國の中核だつた。その歴史が脈々と生きている事が感じられる建物だ。御所の中には鬼が済むといひ世間の噂も、成程これならば、と思わせるものがある。古めかしい建物に巨大な森。夜、とても一人では出歩けまい。

私達は真っ先に梅壺の主である、梅壺の更衣様にご挨拶に上がった。

更衣様は小柄できやしゃで、おとなしやかな、いや、もつとはつきり言えば、気の弱そうな方だつた。何と言つか、霸氣がない。こんな広大で古めかしい御所の中で、ひとつそりと隠れるよつて生きている感じがする。

多数の女御、更衣が妍を競つてゐる後宮に暮らしているのだから、もつと、堂々と、きらびやかにしてゐる方かと思つたら、随分地味な印象がある。中納言家の一の姫様もおとなしい方ではあるが、ずっと明るく、生き生きとしておいでだ。お歳はこぢらの方の方がずっと上だらうけど、性格は正反対なようだ。

申し訳ないけれど、私は最初の印象で「うつとうしい方だなあ」と思つてしまつた。これじや、主上の足も遠のくわ。

ただ、私を基準にしたら、すべての女人がおとなしい人になつちやうんだらうけど。

かけていただいたお言葉も

「雅楽まで口がないけれど、ようしくお願ひするわ」

と、言つたきりで、たいして表情も変わらない。そつけない方だなあ。私の噂のせいかしら？

そういえば他の女房達も、何となく身を固くして、ひつそりと暮らそうとしているように見える。のびのびとしたところがない。ここで十日以上も暮らすのか。私はうんざりしてきた。

ところが私の氣を引きつけるものがあった。庭だ。梅壺の庭はその名の通り、美しい梅が咲き乱れていた。

パツと田につく紅梅は勿論、清廉な白さが光る白梅も今が盛りとばかりに咲き乱れている。

室内には梅花香の香りがたかれているが、この香はそれだけではない、きっと外には自然な梅の香りがいっぱいに広がっているに違いない。私は嬉しくなつて挨拶がすむと御簾から出て、御格子をあげ、縁に出るとと思う存分庭の様子を満喫した。

紅白それぞれに幾本も咲き乱れる梅、広がる香、美しいやり水と池。そよぐ風と暖かな田の光。池の周りには、苔むす岩が彩りを添え、水仙が咲いている。私は庭に出ようと足をのばしかけた。

「まあ、何をなさるんです！」
何処からか厳しい声が飛んできた。

見れば白髪の、年老いたいかにも古長けた古参の女房と言つた感じの女人が、私を睨みつけていた。叔母の顔色には、はつきりと、

「何つて。ちよつと庭に出てみよつかと思つたんですけど」

「今時の人は、平氣で端近によつて、困る困ると思つていましたが、よもや、縁に出て庭にまで出ようと/orする方がいよいよとは思ひませんでした。世の中乱れるにもほどがあります。あなたのじ両親はどんなご教育をなされたのやら」

私はかなり、むつとした。女人の教育は、乳母^{おのと}や、召し使う者よりも、両親の人格が現れやすいものと世間では言われている。だから両親の育て方を非難されてむつとしない女人がいたら、私は顔を見てみたい。

「お見かけしない方ですが、あなたが新参の方ですか？」

「本日から、この叔母の使い走りに使われることになつてゐる、花房と申します。女雅樂の琴を弾くことにもなつていて、よろしくお願ひします」

私の挨拶を聞いて、古參の女房は、ますます嫌な顔をした。

「ああ、あなたが。お噂はかねがね伺つております。あなたは運がよろしいわ」

「は？」

「この私の居る、梅壺につかえる事が出来るのですから。私は梅壺の更衣の乳母で、小侍従と呼ばれています」

「乳母？　あなたが？」

言つてしまつてから失礼だと気が付いた。が、もう遅い。だつて、白髪の彼女がまさか若い更衣様の乳母だなんて想像が出来ない。じゃあ、更衣様の乳兄弟の方は、この方のおいくつの時の子なんだろう？　そんな私の顔を見て、小侍従も察しがついたらしく、すかさず言つ。

「これでも私は姫様と、そのお母さま、自分の子供も六人を育て上げた、乳母の中の乳母です。乳の出も、それは豊かなものでした。今でも女人として現役です。慎み深い女人というのは、いつまでも現役でいられるものなのです。あなたにも、女人としての生き方をじっくりと教えて差し上げましょう」

「これは相当うるさそうな方だ。人に小言を言つのを生きがいにでもしていそう。それにしても

「現役、現役つて、要は男君が切らさずにいたつて事じゃない。どこがつつしみなんだか」と、口に出してしまつ。

勿論、小侍従は聞き咎めて

「あなたには、目上の人間への言葉の使い方から、お教える必要がありそうね」と、私を睨みつける。

「良いですか？」この梅壺は、古式ゆかしい暮らししぶりこそが似合うのです。あの、麗景殿とは違うのです。あなたは御所の事などなにもござ存じではないでしようから、私が一から教えて差し上げます。女雅楽の時までには、あなたも素晴らしい貴婦人となられますよ！」

麗景殿とは女御様の住まわれる御殿の一つで、今は、大納言様の長女が、中宮としてお住まいになられている、現在の後宮の中心となつてゐるはずのことだ。

中宮様は半年ほど前に男御子を無事、お産みになられ、今度の女雅楽の折に、宿下がりされている御実家の大納言家から、御所に戻ることになつてゐた。でも、なんでここに、麗景殿の話が出て来るんだろう？

「あの、花房はまだ、こちらに着いたばかりで、私の局に案内もしておりませんので、この辺で失礼させて頂きたいのですが」

叔母がいつまでも小言が止まらなくなつてはいけないと思つたのか、小侍従の話に割つて入つてきた。

「そうでしたね。では、一旦下がつてよろしい。夜にはまた、参上するようになります。一度、その琴を聞かせてもらわないと」
そういうて小侍従は私達を解放してくれた。

でも、私は小侍従がさつき言つた言葉の方が耳に引っ掛けた。私を貴婦人に仕立てようなんて、以外に大胆な事を言つ人だ。

私の噂が届いてゐる以上、私の父の身分がどれほど低いかは、真っ先に伝わつてゐるはず。

つまり、私をどんなにしつけた所で、所詮は下司の子。誰に感謝される訳でもないだろう。むしろ、私にはあまり表に出さずに、おとなしく引っ込んでいてほしいとは思つても、自分が恥をかかない程

度のしつけさえすれば、そんなにかかわりたくないというのが、本音のはず。でも、小侍従は（あれが嫌みでなければ）本気で私をしつける気持ちがあるようだ。

どうやら彼女は貴族としてかなり珍しく、身分で人を判断しない人らしい。案外悪い人じやなさそうだ。

私と気が合つかどうかは、全然別の話だろうけど。

叔母の局に着いて一心地つくと、私は早速尋ねてみた。

「ね、なぜ、小侍従さんは急に麗景殿の話を持ち出したりしたの？」

「このひらの更衣様に長らく主上のお渡りが無かつた話はしたわよね？ 実はお渡りが途絶えたのは主上が中宮をお迎えになつてからな。小侍従の君はそれをとても気にしてらつしゃるのよ」

「それは、主上と中宮様の氣があつたからじゃないの？ 御夫婦なんだから、相性つてあるもんでしょうし」

「違うわよ。もちろんお一人の御相性もあるのでしようけど、主上は大納言家の大将様と、大変仲の良い御学友なの。中宮様はその大将様の姉上に当たられる方なので、主上は一層、中宮様へのお渡りが多くなるみたい。それに大納言様のご威勢も大変強い物があるから、他の女御様方もお父様方の事を気遣つて御遠慮気味になるのよ。ましてうちのお姫様は更衣でいらっしゃるから、女御様方を差し置くような真似はできないしね。それに」

「それに？」

「こう言つちや失礼だけど、梅壺の更衣様の御実家は、あまり経済的に恵まれてゐる方じやないわ。お母上は皇族の出だから女御様でいらしてもいいくらい血筋は申し分ないけど、御父上は先の帝にかかわつていらつしゃつた方だつたから、今では政治的権力は無いに等しいし、財力だつて……。実はあなたのお父様の援助に頼つてらつしやる所も大きいのよ。表には出せないけどね。だからせめて、きらびやかで華々しい、中宮様に負けないように、つつましやかで品のいい、皇族らしいお暮らしへを小侍従の君は更衣様にお求めになつてゐるの。私達にもね」

それで、みんな、あんなに縮こまるように暮らしてゐるのか。ああ、うつとおしい。

「だから、大将様とゆかりのあるあなたの事を、みんな、どこかで気にかけているの。あなたによくない噂がある事は知つてはいても、あなたの存在が、更衣様のお立場を強くしてくれるんじやないかと、心中では期待しているのよ。あなたには飛んだ災難でしようけど、あなたが梅壺の切り札になつてもらえる事を私も期待しているわ。どうかあなたも大将様の気を引いて頂戴ね。無理なお願いをしているのは分かつてゐるけど」

無理を承知のお願いが、どうやら私には付きまとつものらしい。私は自然にため息が出てしまった。

更衣の涙

夜の参上まではまだ時があると、叔母の局で私達はくつろいでいたが、突然、役人が来て

「今夜は梅壺に主上がお渡りになります。命婦の方にお付きになられている方にも、お琴の「」所望があらうかと思われますので、そのおつもりでお支度下さい」と告げていった。

早速に主上のお渡りとは、帝はなかなか好奇心旺盛な方らしい。

私達は大急ぎで、失礼のないように身支度をした。おかげで琴の調子を見る暇さえなかつた。

暇がないのは小侍従も一緒で、久しぶりの主上のお渡りという事で、人に言つて辺りを片づけさせたり、自ら更衣様の身支度を整えて差し上げたりしている。私に声をかける暇など無さそうだった。

間もなく先づれの声がして、お使者が帝の到来を告げる。そして主上が古式ゆかしくお渡りになられた。

さすがの私も、主上をお相手に、顔をあげていられるほどの肝は無く、おとなしく深く頭を下げていた。

「こちらでは素晴らしい琴の名手を迎えたようですね。楽しみにして、公務も手に着かず、うつけたようになつてしましました」
そう言って笑われているのは、おそらく主上だろう。

「まあ、そのような諧謔（かいじきやく、冗談）をおっしゃって、
そう答えている声は小侍従。

「本当の事ですよ。私は梅壺の方のように、聞きわけの良い人間で
はありませんから。年下の大将などにいつも諫められているのです」

「大将様も」一緒にいらっしゃられるなんて、お久しゆうございま
すわ」

これを聞いて私はぎくりとした。大将様まで来ているの？

「少し、宿直が無かつただけで、久しいとは大げさだな。あなた方
も、時には御簾の外に出てきて下されば、もっと、お話もできるん
だが」

確かに快活な声をあげてているのは大将様だ。

「女人の身でそのような訳にはいきませんの」

小侍従らしく、冗談にもそのまま真つ直ぐに答えてている。固いな
あ。

「私は梅壺にはめつたに用がありますからね。今日も主上に引つ
張り回されてしまつて。後で大納言家に宿下がりしている姉上の所
にも顔を出さないと、ひんしゅくを買いそうですよ」

「どうか。大将様は姉君が中宮になられているんだから、後宮には
仕事でなくても頻繁にいらっしゃっているんだ。知り人もいっぱい
いるだろうし、これじゃ、梅壺から出て歩いたら、いつ、ぱつたり
会つてもおかしくないわ。大将様も、結構型破りな方だから。」

「いやいや、こちらの名手の琴と大将の笛を、どうしても合わせて聞いて見たかったんですよ。それが叶わぬうちに私は仕事を受けたままになりそうでしたから」

大将様の笛と合わせる。それも即興で。やはり、主上は好奇心がお強そうだ。

帝と聞いて、ついつい天上かなたの方と恐れ入ってしまった帝が、考えてみれば、主上も聴衆の方のおひとり。果してこの方は楽の音から何かを導き出そうとしている、心ざまの深い方か？ それとも好奇心に駆られただけのただの男君か？

「大将が女君と合奏する顔も眺めてみたかったものだし」

きまり。ただの男君。私はそつ、判断した。

「して、その琴弾きは、どちらにいるのです？」

主上はそういうて女房達を見渡した。

「私は命婦に付きしたがつて、琴弾きです」

私は真っ直ぐ、顔をあげた。たとえ主上と言えど、私は扇を使わない。主上が私の演奏をご所望なら、主上は聞き手。他の聴衆の方と一緒にだろう。私は琴弾きである時にはへりくだる必要はないと考えた。

「花房。扇はどうされました？」
たまりかねたのだろう。小侍従が聞いた。

「私、琴を弾く時には、扇は使いません。たとえ聞いて下さる方が、どなたであろうとも」

私ははつきり言った。

私の噂通りの態度に、主上は一層好奇心むき出しの顔をされる。そのお顔は明らかにこの状況を楽しんでいらっしゃる。

「私の琴を、大将様の笛と合わせてお聞きになりたいとのことです。が、さっそく演奏させてもらつてもよろしいでしょうか？」

「勿論です。今夜はそのためにこちらに伺つたのですから、主上は何心もなく、明るくおつしやる。

すぐそばの御簾のうちには、長らくお渡りが無かつた、更衣様がおられる。そんな事は一向にかまつていらつしやらない。私への好奇心が勝つてしまわ正在する。

よおし、それなら。

「では、大将様。」この曲は御存じですか？」

そういうながら、私は大将様の隣に行つて、そつと耳打ちをする。大将様は、一瞬、驚いたお顔をしたが、私の顔を見て、につっこりとうなづかれた。

私達は早速演奏を始めた。曲は「想夫恋」。妻が夫を慕う物語の伝えられる曲だ。

私は以前のような大胆な弾き方などしない。あくまでも優しく、そつと、妻が夫に寄せる心はこんなものであろうかと、たおやかな響きが人の耳に残るように弾いていく。大将様は、私の琴の音を煩わせないように、静かに笛の音を添えて下さった。私も琴に、悲しみの哀切を添えて演奏する。

すると、演奏に聞き入っていた更衣様のすすり泣くお声が聞こえて来た。御簾の内側に居られるので、私達にはお顔は見えないが、更衣様は明らかに泣いていらっしゃる。

主上の角度からなら、そのお涙はおそらく見えておられるはずだ。唖然とその姿に見入られているようだ。

やがて、演奏が終わると、主上は御簾のうちに入られた。更衣様の元に寄り添われる気配がする。

「今宵は梅壺の方と、積もる話がありそうです。一人でゆっくりしたい。大将には下がつてもらつていいか?」

御簾のうちから、主上のお声だけが聞こえた。

「勿論でござります。私も、帰りまして姉上の『機嫌伺い』に参りますので」

大将様も、そう、御答えになつた。

それを合図に、皆、そつとその場を離れていく。私も叔母につき従つて、その場を離れた。

そのまま叔母について、局に戻ろうとしたが、行く手に大将様が

立っていた。

「先ほどは失礼いたしました」

そういうて頭を下げて、私は叔母とともに通り過ぎようとしたが、大将様が、袖で私の行く手をさえぎつてしまつ。叔母は目くばせをして、そのまま行つてしまつた。いや、それじゃ、困るんだけど。

「先ほどは、良い機転を利かせて下さいましたね。これで梅壺の方の面目も、おおいに立つたことでしょう」

「たまたまです。主上がおおらかなお人柄でいらしたから。もし、御怒りを買つていたら、面倒どころではありませんでした」

私はそう言つて、するりと身をかわしてその場を離れた。

それでも私は軽く振りかえり、大将様にそつと会釈をする。大将様が私の考えを察して下さらなければ、さつきの演奏は成り立たなかつたのだから、感謝はしているのだ。大将様も会釈を返して下さつた。

大将様も急ぎ足でその場を離れて行く。きっと、姉上の中宮様への御報告に、大納言家に戻られるのだろう。

その夜、寝床に着いてから、私は眠れなくなつてしまつた。急に自分のしたことの大膽さに気が付いたのだ。

本当に主上がおおらかな方でよかつた。良く考えてみれば、顔も隠さず、あんな皮肉な選曲をした私は、あの場で御不興を買って出されてもおかしくなかつたのだ。

そうなれば、梅壺の更衣にも害が及んだかもしれないし、叔母の立つ瀬もなくなってしまっていたに違いない。

あの場では、主上がちょっと無神経な方に思えたし、あんな風に無視されて咎め立ててもしない更衣様も、情けないような気がした。おまけに大将様がいらっしゃったから、私もついつい、強気になつていた。

でも、相手はこの国の帝。お言葉一つで、私はどう扱われても仕方がなかつたはずなのに、主上はお咎めにはならなかつた。主上も一見、無神経に見えたけれど、きっと、御心のうちはお優しい、素直な人柄の方なのだわ。

そういう方にあんな態度をとつてしまつなんて、浅はかだつた。

私は一晩中後悔して、良く眠れぬまま朝を迎えていた。早く支度をして、更衣様に謝らなければ。

ところがそんな朝早い時間に、叔母の局に女官が訪れた。叔母は大いに慌てていた。その女官は主上に直接仕えている、尚侍ないしのかみという大層位の高い女官が、召し使つてらっしゃる方なのだそうだ。その方から叔母あてに、美しい袴（つちぎ、女性の衣装）が贈られた。

「これは、主上から花房に下賜されたものだわ。まあ、まあ、大変。こんな名誉な事があるなんて」

叔母はうろたえながらも、私にお礼の手紙を書かせ、こういう時にちょうどいい、儀礼的な歌をつけて、女官に散々へりくだりながら手紙を渡していた。私は呆然としている。

「表面上は尚侍から、私への贈り物に、あなたがお礼をしたことにしているけれど、彼女は主上のお使い役よ。彼女があなたにお渡し下さいと言ったのだから、間違いなく、これは主上からあなたに贈られたもの。これは大変な名誉だわ。あなたのお父様に、さっそくお知らせしなくては」

何だか、叔母の方が舞い上がっていた。

この話は宮中にパツと広がった。私は初日の緊張で気付かずについたのだが、私の事は後宮に住む人全てが注目をしていたらしく、昨日からの一連の話が、宮中の話題をすっかりさらって行つたらしかつた。

そんな注目を一身に浴びたまま、私は更衣様の元に参上した。

小侍従は苦虫をかみつぶしたような顔をしていたが、更衣様は昨日とは打つて変わった晴れ晴れとした面持ちで、私に近くに来るようになると言った。

「昨夜はあなたのおかげで、主上と本当に久しぶりに、ゆっくりとお話が出来ました。主上は、中宮や、大納言様に氣をお使いになって、麗景殿にばかり足をお運びになつていたのではなく、最近は世の中の乱れが激しく、御公務でも、お気を回さなければならぬ事が多いので、つい、お親しい大将様がよくいらっしゃる、麗景殿の方に足が向かいがちになるのだと、おっしゃつてくださいました。決してあちらの華やかさにひかれるのではなく、心をくつろがれる

時間が欲しくて、同じ方にはかり通いがちになつていらっしゃった
そうです」

ふうん。男心と言つが、主上の様なお立場の方のお心と言つが、
そういうものは分からぬいけれど、やつぱり精神的なお疲れがある
時つて、立場的な気遣いをしなくてすむ所に自然と足が向いてしま
うんだろうな。特に、中富様の弟の大将様は、主上とお親しくなさ
つているみたいだし。

「でも、梅壺にも、華やかさとは違う、落ち着いた静けさと、丁寧
な心づかいがあるともおっしゃつてくださいました。私は自分と、
この梅壺が地味であることを気にしそぎていたようです。あなたの
琴のおかげで、私は素直な自分を主上に知つていただけました。本
当にありがとうございます。主上もあなたには感謝しているのですよ」

更衣様はそつおつしゃつて、『満足そつな頬笑みを私に向けて下
された。

昨夜は、完全に勢いに任せてしまつていて、浅はかな行動をとつ
ていた私としては、いづれ、臆面もなく褒められても、居心地の悪い
物がある。

でも、更衣様が御満足して下さつていいなら、これでよかつたの
かな？

更衣様が御満足なようなので私は胸をなでおろしていたが、小侍従はそうはいかないようだ、

「更衣様はああおつしゃつたけど、あなたの身が無事でいらつしやるのは、主上の温情あつてのこと。昨日のあなたのお振る舞いが正しかつたとは私には思えません。一つ間違えれば大変な事になつていた事を、あなたには分かつていただかない」と、せつそくお小言が始まった。

「それは、私も反省しています。今朝は更衣様にお詫びに上がるつもりでしたから。正直に言つと、後から怖くなりました。何事もなくて良かつた」

つまらぬ意地を張つてもしづがないので、私は本音を伝えた。

「まあ、無駄に舞い上がつてはいないうですね。あなたには大将様の後ろ盾がおありになるから、一層大胆になつておられるのでもうが、そこに頼るのはお辞めになるべきです」

「別に頼つているつもりは」

「いいえ。あなたはやつぱりお若い。相手に悪意がないと感じると、比較的すぐに安心してしまつ。まだおわかりにならないでしようけど、公達（公家の男性）といつのは悪意は無くとも気まぐれで時に残酷なものなのです。あなたのように無防備な方は、いつ、面食らつのような思いをするとも限りません。女人がつましましやかに生きることにはそれなりの先人の知恵があるのです。女人には女人の知恵がある。それを生かせる方こそが、本当の貴婦人となられるので

す

へえ。やっぱり小侍従は、世の人々とは少し違うみたい。女人は早く位の高い良い男君に恵まれて、屋根の奥で子供のしつけにいそしむのが一番幸せだといわれているけど、この方は長い乳母勤めのせいか、御所に勤めているせいか、もう少し、理に勝つているところがあるみたい。

でも、私にも言い分はあるわ。

「私の事を心配して下さるお気持ちは嬉しいんですけど、私は、世の人々に、伝えたい事があるのです。女人にだつて言いたい事、伝えたい事があるというのを、色々な人に知つて欲しいのです。他の方々が歌や、しぐさに込める思いを、私は自らの言葉や、琴の音、この姿で堂々と伝えたいのです。女人の名は役職は残されても、名前そのものは記憶にも、記録にも残してはもらえないよね？　名を隠し、姿を隠し、わずかな歌と、人の口に登った容姿だけを残して、あとは誰とも知られることなく消えてしまうなんて、なんだかasmine。私は悪口でもいいから、この都に思いつきり、爪痕を残してみたんです」

「先人の方々が、女人が傷つかず、他の方々も傷つけずに済む知恵を授けて下さっているにも関わらず、あえてそれをしないというのですか？」

小侍従は、あきれた顔で私を見ていた。

「だつて、心を閉じ込めて、なにも伝えられずにいれば、やっぱり傷ついてしまうもの。表面が穏やかでも、物言えぬ自分が、自分を傷つけるんなら、意味は無いわ。私が琴を弾く時は、誰かに何かを

伝えたい。そのためなら、中納言様や、大将様の後ろ盾だって、利用するわ」

小侍従は軽くため息をついた。

「あなたは大人や、男君を利用しているつもりでしょうけど、人は利用するものでもされるものでもありません。若い女人のあなたは必ず情が上回ってしまう時が来るでしょう。その思い上りが大切なものを失うことにつながるかもしませんよ。あなたが姿を隠さない事をとがめるのは控えましょう。けれど、もっと良く考えて行動できなければ、あなたが私に何を言つてこようと、私はあなたを認めませんからね」

そう言つて小侍従は、私に自分の扇を渡してよこした。これだけは使えということなのだろう。

小侍従にはお冠を受けた私だが、宮中では、私はすっかり有名人になってしまっていた。

もうすぐ御所に麗景殿の女御がお帰りになると他の女御、更衣様方が、戦々恐々となさっている所に、宮中に着いたその日に主上の関心を惹き、大将様と合奏をし、主上と更衣様の御夫婦仲を深めて、主上から袴を下賜された。

そんな私の大胆な行動で梅壺の更衣様の「注目度」が、いっぺんに上がることとなつた。

他の女御様方は、うらやむやうに妬むやうで、梅壺の琴弾きはなか

なか機転の利く、はしつこい女人。主人を立てるのがつまい、やり手の女人。そんな評判が立っているらしい。

梅壺の女房達は、皆、私をほめそやしてくれたし、他の御殿の女房方も、私に注目しているという。

人に褒められて悪い気はしないが、今朝方まで「やり過ぎた」と後悔していた私は、ほつとした気持ちが先に立つていて、それほどしてやつたりといふ気分にはなれなかつた。

それがかえつて誤解を生んだらしく、私は世間の噂よりは奥ゆかしさがある女人、ということにもなつたらしい。

おかげで私は宮中で、ちょっとした人気者になる事が出来た。

皆に受け入れられてみると、「宮中はとてもおもしろおかしい」ところだつた。

大きな邸で深窓の令嬢や、北の方様などに使えるのは、情緒あふれる「もののあわれ」が感じられる暮らしだ。

それも勿論、素敵な事なのだけれど、宮中はもっと刺激的で、社交的な場所。「おかし」を感じる暮らしだ。

御簾のうちからそうそう出られないのはここも同じなのだが、何せ御殿の広さが違う。召し使えられている女房も数が多いので、それだけでも華やかだ。

それぞれの御殿が妍を競つてゐるだけあって、女房の衣装も華がある。宮中は流行りごとの発信源でもあるから、みな、それぞれに工夫を凝らしているのだろう。

確かに梅壺はそういう意味からすると少し地味なところはあるが、古風な梅を基調とした統一感があつて、落ち着いたたずまいが感じられる。寄せ集めた華やかさとは違つ、しつとりとした趣があつた。

そして、主上につかえる女官たちが、清涼殿に彩りを添えている。何をするにも御所に伝わる、古式ゆかしい習わしがあつて、普通のお屋敷とは違う雰囲気がある。

そういう、女房や女官、彼女たちに使われる、私達のような少女たち。それだけの女人達が活発に仕事をこなすのだから、そこに生まれる社交も華があつた。

互いの衣の重ね方を指摘し合つたり、刺し色の話に興じたり、流行の和歌を教え合つたり、恋の話にも花が咲く。何よりも噂話やおしゃべりに興じるのには、最適だつた。

そう、誰それは恋仲と噂も立つはずだ。ここには殿上人の公達達も集まつてくるのだから。

お邸では公達達は邸の主として君臨するか、客人としておもてなしを受ける人々だが、ここは彼らの職場でもある。そして後宮は社交の場所でもあるのだ。

御簾を一枚挟むとはいえ、共に物語を楽しみ、歌を詠み、樂を奏で、諧謔を楽しむ。扇で顔を隠してはいるが、御簾の外へ出て事務的なやり取りだつてする。こんな世界は初めてだ。

その公達達が、噂の私と一言言葉を交わしてみよつと、叔母の局や、ひさしの近くを訪れて、私を待ちうける。

彼らは私にお世辞を言つたり、嬉しがらせたり、からかつて見せたりする。何とか私の顔を、外にさらけ出させようと、あれこれ言つては持ちあげて来る。

私も楽しくて、つい、乗せられそうになるのだけれど、小侍従の扇を目にすると、何となく心配してくれている彼女に申し訳ないような気がして、なんの意味もない時に顔を晒すのはやめよつと思つなおす。

そのせいで、初めほどには「噂ほど大胆な女人といつ訳でもない」と、口の端にのぼる事も少なくなつた私だが、彼らと物怖じする」となく冗談を言い合つたりする私に、別の面白みを感じるらしく、公達達は私に声をかけるのをやめずにいたので、結局私は宮中暮らしを十分に満喫した日々を送る事が出来ていた。

それでも私の身分の低さを陰であれこれいう人たちもいたけれど、ここまで身分が低ければ、かえつてものの数には入らないので、誰も私に干渉する人などいない。唯一苦言を言つるのは小侍従だけだ。

女雅楽の練習も、それぞれの御殿から腕自慢の人たちが集められているだけあって、とてもやりがいのあるものだった。

田舎育ちの私は、もともと都で女房勤めをしていて、大変琴が得意だったのだが、結婚して夫につき従つて武藏の国に來ていた女人に、琴を一から教わつた。

でも、あまり他の方の演奏を見聞きする機会が多くは無かつたので、どうしても彼女の癖がうつってしまい、さらに私の性格からか自己流になつてしまつていたので、こうして大勢の方々と練習するだけでも、いろんな事が解つて楽しかつた。

女雅楽はお帰りになる中宮様をお慰めするためのものもあるので、麗景殿で行われる。

そのため、取り仕切つていらつしやるのは、あの、大将様だ。ばつたり出会つゞこりか、毎日顔を見る羽目になつた。

そこは少々ばつの悪い物ではあるけれども、大将様が笛を合わせてみたり、童殿上している子供達も一緒に、太鼓をたたいたり、笙笛を吹いたり、大きな琵琶を懸命に支えながら弾いたりするのも、賑やかでかわいらしかつた。

大将様は後宮の人氣者らしく、どこに行つても誰かしらからお声がかかつてくる。

特に美しい女房の方などが、大将様にお声をかけると、大将様も、わざと私に見せつけようとなさつているのが分かる。この方にそういうかわいらしいところがあるとは思わなかつたので、そんな事も私には楽しかつた。

しかも、私と梅壺の更衣様を大将様が常に気にかけているという

ので、更衣様も自然と畠に注目されていた。

決して華やかな、活発な方とは言えない更衣様だが、さすがは皇族の血をひかれるだけあって、どこか気品がありになる。昨日今日の付け焼刃ではない、奥ゆかしさがあった。

初めてお会いした時は、心を閉ざされていたせいか、小さく固まっているような印象を受ける方だったが、それは主上のお渡りがなくなりたにもかかわらず、中富様に対抗しなければならないという重圧から来るものだつたらしく、そこさえ和らげば、この方も、お優しい、控えめで落ち着きのある方のようだ。

「のよつな方に華やかな暮らしがかえつて肩がこるんだろうな。注目されるのはいいけど、かえつてご負担にならなければいいんだけどな。」

そうは思いながらも、私は御所暮らしの楽しさに、すっかり浮かれてしまっていた。ここが妍を競うのは、男君たちの思惑が絡んでいるのだという事を、すっかり忘れてしまっていた。

そう、ここはあくまでも、後宮政治と云う、政治の世界だったのだ。

女雅楽の日まであと一日と迫った日に、梅壺の更衣様の御父上様がお役目をしばらく謹慎することになったとの知らせが入った。誰もが寝耳に水の事だったので、驚き慌てていた。

梅壺の女房達は、皆、知らせを伝えに来た役人に詰め寄った。役人も小さくなりながら答える。

「ですから、先日、ある権門のお屋敷に押し入った強盗が、前帝とつながりがあつたようなんです」

「でも、更衣様のお父様は、今は前帝とは何の御関係もないんですよ。それなのに、なんで今更、御謹慎をしなくてはならないんですね？」

小侍従が役人に一層詰め寄る。

「今は御関係がないとはいえ、強盗の一昧には、更衣様の御父上が昔召し使っていた者がありましたので、やはりここは御責任を果たす意味での御謹慎ではないかと思われますが」

「そんな！ もう、何年も前に勝手に行方をくらました者のために、責任を取れとおっしゃるんですか？」

「しかし、これはもう決まってしまったことですので。ですから、こちらの更衣様にも、今度の女雅楽が済みましたら一旦、お里下がりをなさつていただくようと、大納言様の仰せです」

「大納言様の……」

誰もがこれでピンときたに違いない。

最近、更衣様の注目が後宮内で上がつて来ている上に、ここ数日、主上のお渡りも続いている。

女雅楽の日は、当然主上は中宮と過ごされるだろうから、その翌日に更衣様を御所から遠ざければ、梅壺の勢いは明らかにそがれるだろう。ましてあちらには、東宮となられるであろう生まれたばかりの男御子をお連れての御所入り。梅壺の作りだした雰囲気など、あつという間に搔き消されてしまふに違いない。

所詮は後宮政治。やはり陣の座の権力は大きい。結局は力がものを言つ世界なのだろうか？

大納言様もこういう時には人も無げな事を容赦なくやつてくるようだ。

殿方達の世界はそういうものなのかもしれない。追うも追われるも、勝つも敗れるも、当人達の時流の読み次第。いうなれば本人の実力なのだろう。

しかしそのために送り込まれて、一生を決められてしまった、更衣様はどうなるのだろう？

そのまま御所の奥深くで、ひつそりとお暮らしになれというのだろうか？

そうでなくても更衣様は御父様の後ろ盾がおぼつかないお立場だ

つた。自らのお血筋と主上の「ご寵愛」だけに頼るほかにない状況に追い込まれている。それなのに肝心の主上との御愛情にまでこんな政治的圧力がかかって来たんじゃ、立ち打ちのしようがないじゃない。

私は頭にきた。

癪だけど。本当に悔しいけれど、私は大将様に手紙を書いた。本来なら女人は手紙を待つもので、先にこうして手紙を送るのはかなり関係が深くなつてからの事だ。こうやって、事実上の親しい関係を裏付けていくのは、女人の私には不利なのは分かつてはいても、一言文句を言わずにはいられなかつた。大将様は大納言家の「長男」。今度の事をどう思つているんだろう？

前帝が怪しい者たちと付き合いがあつて、色々と利用しているのは前から分かつていていた事。私がさらわれた時などは、事情を知つていた女房が自害して、直接かかわつた男が一人、斬り殺されたのをいい事に、その時の陰謀も、前帝達の存在も、大納言様方にもみ消されてしまつたはず。

それなのに今回は、更衣様の御父上様からとつぐに手元を離れて行方知れずになつっていた男が、前帝を頼つて強盗を働いていたという、まるで筋の遠い罪で御父上様を謹慎させてまで、更衣様を主上から遠ざけようとしている。これつて職権乱用じゃないの。いくら都の安寧のためとはいえ、更衣様に対しても思ひやりがなさすぎる。

お立場についてはともかく、主上との絆まで断とうとするやり方はひどいじゃないの。

私の手紙は無事大将様に届いたらしく、返事を待つまでもなく大

将様自らが、叔母の局へとやつてきた。

「大納言様はひどいじやないの。なんでこんな無法な事がまかり通るのよ？」

「あなたのお怒りはもつともですが、今は仕方がないのですよ」

「何が仕方ないんですか？ 大将様だつて、この間の合奏の時には更衣様の面目が立つたと言つて下さつたぢやないの。ようやくお二人のお心が繋がりかけたと「うのに、どうしてこんな真似をなさるんです？」

「それは、更衣様が皇族の血を継いでらっしゃるからです」

大将様は説明した。

「今、都は大納言家の力によって、ようやく人心が一つにまとまっているところです。前帝の世では、人々の心が落ち着かず、政事は滞つてばかりでした。今はそれに取つて代わつて大納言家が都を統率しています。それでも、世には盜賊や人さらいがはびこり、さらに、前帝の悪事に人々は脅えている。それが今度は大納言家への不満となつて現れ始めているのです。それを抑えるためには、大納言家は絶大な権力を維持しなければなりません」

「それと、更衣様と、どう関係があるのよ？」

「更衣様のお母様は皇族のご出身。御父上も今は権力を失つてはいますが、もともと身分は低くありません。そんなお血筋の更衣様の元へ、主上が頻繁にお渡りになるようになつた。これが続いて、今、更衣様に男御子がお生まれにでもなつたら、どうなると思いますか？」

「あ……」

「ここまで言われて頭に血が上っていた私にもようやく理解できた。」

中宮様は大納言家のご長女。権力は絶大だし、御身分も悪くはないが、皇族の方との血筋は近いとは言えない。女御様の下のお立場とは言え、純粹に血筋の良さを比べれば更衣様の方が上になってしまつ。

それにお生まれになつた男御子もまだほんの赤ん坊。更衣様が男御子をお産みになれば、これはお歳の近い東宮候補がお一人になつてしまつ。まとまりかけた人心が、また一手に分かれないとも限らない。

「更衣様のお立場は分かります。本来そのために後宮に上がられたのですから。世が前帝の時世のままなら、華やかにときめかれて、もしかしたら東宮の一の方のお立場であられたのかもしれない。もともと更衣様も主上ともお歳が近く、後宮に居られる年数も長いのですから、主上とも幼馴染のように親しみ合つておられたはず。ですから主上も本来は更衣様と睦まじくなさりたい気持ちは持つていいでです。それだけに、中宮の男御子様がご成長なさるまでは、我々は油断できないのです」

「では、では、更衣様はどうなるのです？ お父様の後ろ盾も頼りなく、やむなく更衣の身に甘んじて、その上肝心の主上との絆まで断たれてしまつたら」

「『』夫婦の絆はそう簡単に断たれてしまうものではありますよ。我々も主上がたまさかのお慰みにお渡りになるのをお止しようとは思いませんが、頻繁にお渡りになるには今は時が悪いのです」

「そんなの勝手だわ！　お一人のお気持ちはどうなるのよー。」

「姫、ここはそういう場所なのですよ。後宮とは、時流に合わせて調整しながら、次の世代を育成する場所なのです。世の中を安定させるために」

私はこの方に姫などと呼ばれる身分ではない。その私に大将様がそう言つてくるときは、私を説き伏せようと/orする時だ。まるで幼い子供に諭すような口調になる。

「身分が高くなればなるほど、これは仕方のない運命でしょう。情けを通じると、結婚は、意味が違うのです。ましてや後宮では世の流れをも変えてしまう。我々は政治家なのです」

政治家。

そういう目で大将様を、ううん。殿上人や公達を見た事は無かつた。彼らはただただ憧れの人たちで、本来なら口もきいてもらえないような人たちと、思いがけずこうして言葉を交わせるようになつて、私はなんて幸運なんだろ？と思つていた。

でも、彼らは確かにこの国を動かしている。彼らが帝に色々な提案をし、意見を交わし、人々の暮らし方や、國のありようを定めて、それを帝が詔として発するからこそ、この国は成り立つている。その意見を通すためなら、殿方達は多少の強引な手立てもためらわず

に使う物らしい。

後宮なんて、世の流れを最も象徴する場所なのかも知れない。

私は大将様を今まで見たことのない、全くの別人を見るような思いで見ていた。

もしも私がそれなりの家柄の姫で、大将様の政敵になる立場に陥れば、大将様は多少のためらいはあるとも、私を切り捨てるなり、利用するなり、なさるに違いない。それは男君の情としてではなく、冷たい政治家の顔でなさるのだろう。

大将様が何心なく私にお話をされ、親しみを感じて、結婚まで持ち出したのは、私がそう言つた事に巻き込まれることのない、身分の低さの気楽さもあつたに違いない。そう考えると何だか裏切られたような気分になる。

「公達というのは、時に気まぐれで残酷なもの」

小侍従の言葉が蘇る。確かに大将様に悪意はない。それでも彼らの政治家としての顔に、傷つけられる女人は多いかもしれない。更衣様のように。

でも、人は人を利用するものでも、されるものでもないと言った、小侍従の言葉はきれいごとすぎるわ。男君はこうして女人を利用しているじゃないの。

何だか私は愕然としてしまい、沈み込んでしまった。

「すいませんが、少し休みたいのでこれで失礼していただけませんか？」

私は沈みながら言った。

「分かりました。夕方の琴の練習にはお越しください」

大将様はそういうてその場を離れようとする。

立ち去ろうとして、大将様は足を止めた。そして振り返つていう。

「私は主上と幼い頃から親しくしてきました。主上はそれほど情け知らずな方ではありませんよ。あなたはあまり心配なさらない事です。きっとお一人は、姉上とは違う絆をお持ちだと思いますよ」

大将様が私を慰めようとしてくれているのは分かったが、私はつい、聞いてしまった。

「その絆は更衣様の苦しいお立場を救つてくださるのでしょうか？」

私は沈んだ気持ちのまま、大将様に尋ねた。

「……」

大将様はお返事を下さることなく、衣擦れの音だけを残して、立ち去られてしまった。

「大将はあの琴弾きに、随分責められたようだね」
主上は大将の顔色をうかがいながら言つた。

「いえ、どうとこう事は無いのですが、身分がら後宮の事は良く分かつてはおりませんし、何しろ氣の強い女人ですので」
大将は氣を張つて、笑顔で答えて見せる。

本当は氣の強い花房が沈んでいた事を気に病んではいるのだが、今度の事をもつと氣にしているのは当事者の主上のはずだ。

「主上の方こそ、梅壺の方をお里下がりをせられるのは、不本意な事でしよう。心中をお察し申し上げます」

「いや、父親の謹慎中に更衣をなまじ宮中に残しても、私の通りもないままに、心ない視線にさらされるよりは良いのかもしれない。私も更衣には、少し情が傾き過ぎたようだ」

主上も、中宮が不在の間は出来るだけそれぞれの女御方の元へ一通りにお通いにはなられていたが、どうしても更衣様にまで足を向ける機会はそう、多い物ではなかつた。

更衣様は主上と最も長く連れ添われている方なので、主上も本当のところはむつとお通いになりたい方ではある。

しかし、今では主上には、中宮の他にお一人の女御様があられる。お立場から言つたら女御様方を軽んじられる訳にはいかない。更衣

様が女御様を差し置いて、主上のご寵愛を多く受けたとなれば、どんな所から、人のねたみを更衣様が受けるとも限らないし、その父親も難しい立場に追い込まれるやもしない。

そうなると、それの方のお立場や、様々な人の思惑を考慮しながら通わなくてはならない。中宮様が不在の時は向こうも待つているだろうとは思ってはいても、色々な事情を気にしなければならない。

更衣様もそこを気にかけていて、いつも控えめに、一步引いた態度でいらっしゃるが、やはり寂しさは現れてしまう。その姿を見ると主上も哀れに思われて、つい、情が傾き過ぎて通いつめたり、それを反省して全く足が遠のかれたりしてしまつようであった。それがかえつて更衣様を苦しめるのではあらうが。

「梅壺の方は長く私を理解しているので、私もつい、あの方には甘えてしまった。多少通う事が途絶えても、あの方なら我慢して下さるだろうと思つていた。あの涙を見るまでは。だから、あの方へのお詫びのつもりで、通いつめてしまつたんだ。私はかえつてあの方を追い詰めたようだ」

「主上のせいでは御座いません。ここはそういう場所です。お一人のお立場ではこういう事が起くるのも仕方のない事でござります。お里下がりまではまだ一日あります。お一人でじゅつくり話し合われるのがよろしいでしょう」

大将もそう言つて主上をお慰めするが、生涯を縛られた女人の立場からすれば、このような事に耐えるのは、やはり苦しい事に違いない。同じ女人の花房に理解しろというのも、無理があるのかもしれない。

じついつ事で主上が出来る事は殆んどないと嘗つていい。あるとすれば主上のお優しい温情ぐらこのものだらう。

その主上の優しさが、更衣様をお救いする事は出来るのだらうか？

こればかりはお一人の心のうちの問題だ。大将は花房に尋ねられた答えを見つけられぬまま、主上の心情に思いをはせていた。

夕方の琴の練習の前に、私は梅壺を覗いて見たが、やはり皆、元気がない。更衣様の御父上が御謹慎中なのだから静かにふるまつているせいもあるのだろうが、ようやくはなやぎが戻ったところに冷や水を浴びせられたような事態に、皆が沈んでいるのだらう。

私が余計な事をしなければ、こんなに急に更衣様のお立場が追い込まれるような事は無かつたかもしれない。私はすっかり後ろめたくなってしまった。

今日は公達達が、叔母の局を冷やかしに来る事もなかつた。公達だけではない、誰もが梅壺を遠巻きに眺めているような気配がする。昨日とは打つて変わって、手のひらを返したような空気が流れている。

これが後宮といふこの本質か。私は梅壺に注がれる痛いまでの視線を感じていた。

更衣様のお立場では、ちょっとした事が起ころるたびに、こんな視

線が集まつたのだろうか？ これでは最初に更衣様にお会いした時の梅壺の雰囲気もうなずける。皆、普段から慎重にならざるを得なかつたのだろう。

初めて梅壺に来た日は、ここをうつとおしいと感じたが、本当にうつとおしいのは、後宮にかかる政治的思惑と、それに左右されている人々の視線だつたんだ。

麗景殿に入ると、その視線はさらにあからさまになつた。同情と悪意が私に向けられる視線の中に入り混じつてゐる。皆、私から顔をそむけながらも目でちらちらと様子をうかがつてゐるようだ。

こんな態度を取られたら、いつもだつたら黙つていられないところだが、私はすでに更衣様にご迷惑をかけてしまつてゐる身だ。ここで下手な騒ぎを起こすわけにもいかない。我慢のしどころだらう。

おかげで私は大将様に、かなりハつ当たり気味な視線を送つてしまつた。これもそれも、大納言家が更衣様を追い詰めているせいなんだからね！ 私は一言も大将様と言葉を交わすことなく、その日の練習を終えた。

「姫、花房の姫、藤花の君」

大将様が私にお声をかけているのに、無視して梅壺に戻ろうとしていると、さらに追いかけてこられた。

「どなたをお呼びですか？ 藤花の君なんて、聞いたことのない名ですこと」

仕方なく私は足を止めて、嫌みたっぷりに返事をした。

「そんなおつしやつ方をしないでください。前に言ひたでしょう？
私はあなたのほととぎすだと」

大将様は「やれやれ」といった様子で私の前に立ちふさがった。

確かに以前、大将様は御自分を花房という名の私に寄り添つて鳴くほととぎすにたとえられた事があつた。

「梅」には「うぐいす」。「紅葉」には「鹿」。「藤の花」には「ほととぎす」。遠い昔からの決つた組み合わせ。

そこにたとえて大将様は私に言ひ寄られてこられたのだ。

「私は自分の蔓枝にほととぎすを泊らせた覚えはありませんけど？」

「まあ、そうおつしやらずに。一人の時は私はあなたにお気楽に、ほととぎす、とでも呼んでいただきたいのですよ。ですからそんなに怒らないでください。更衣様の事は、私にも主上にも、どうする事も出来ない事なんですから」

なーにが「ほととぎす」よ。一国の帝と、国一番の権力者の息子が、か弱い更衣様一人お助け出来ない癖に。

「どうにもできないのでしたら、私達の事はほつといてもらえません？ こうして大将様とお話している事も、ひょつとしたら更衣様の迷惑になるかもしだせませんから」

「そう、苛めないでくださいよ。困ったな。実は私はあなたにお願

いがあるんですよ

「大将様が、私にですか？」

「私が、あなたです。あなたにぜひ、琴を弾いていただきたいのですよ。更衣様と、主上のために」

梅壺に戻ると、皆の元氣のない中で、小侍従が一人、氣を吐いていた。

「このいつ時こそ、更衣様のお慎み深さ、氣品のあるお過ごし方が物を言つのです。人の目を引くことだけが、女人の価値ではありません。皆、もつと胸を張つて、恭しく主上をお迎えしなくてはなりません」

そう言つて、逗子の置き方、几帳の下ろし方一つにまで、こまごまを指図をしたりしている。

「けれども、女雅楽が終わればすぐに御所を離れなければならないんですよ。今更気を張つたところで、こちらの更衣様はかすまれてしまつんじやないでしょつか？」

女房の一人が、そんな愚痴を吐く。言葉にはしないものの、そう思つている人は他にもいるに違ひない。

「何をおつしやるんですか！ 今度の御退出は一時的な事。更衣様はすぐにお戻りになられます。その時に主上に更衣様の事をおなつかしく思われるよつに、精いっぱい努めるのが私達の役目ではあり

ませんか。ここは麗景殿とは違います。主上を面白おかしく過ぐせ給う場所ではありません。たとえたまさかでも、おなつかしく、心安らかに過ごしていただくといいなのです。そこを私達は忘れてはいけません」「

小侍従は扇を開いた中からも、目を鋭く光させて、私達をしつかり見据えながらきつぱりと言つた。

ああ、やはうこの方は、心から更衣様の事を思つてお仕えしてらっしゃるんだわ。更衣様の良い所を良く御存じの上で、決して他の方々に劣ることのない方だと信じていらっしゃるのだね。

でも今宵はこの方から、私の思つがままに弾く琴を、認めていただかなければならぬ。先日の通り一遍の弾き方ではない、私が魂を込める時の琴の音をお一人にお聞かせしなくてはならない。

そのためなら私はどんな弾き方もする。小侍従はそれを認めて下さるだろ? つか?

「小侍従さん。今夜は私はお一人のために琴を弾かせて頂きたく思いますが、私がどんな弾き方をしても黙つて見届けていただけないでしょうか? 几帳立てて、決してそこから姿をあらわしたりはしませんから」

私は真剣にお願いをした。心からお一人のために弾きたいのだという思いを込めた。

小侍従は頷いて、私の願いを受け入れてくれた。

主上が梅壺にお渡りになる。

「こんな時に梅壺にお渡りなんて」と言つた、無言の視線が他の御殿から突き刺さつてくる中を、主上はかまつことなく訪れて下さる。私達もそれに応えなければならぬ。落ち込んでいる暇など無いはずだ。

まして私は女雅樂が終わつたら、ここを去らねばならない身。ご迷惑をかけた更衣様のために、精いつぱいの事をしなくてはならない。

私は几帳の陰に用意された琴の横で、主上と更衣様に深々と頭を下げていた。

「私などの、つたない琴の音ではあります、今宵は是非、更衣様にお聞きになつていただきたく存じます」

「私に、ですか？」

「そうです。僭越では御座いますが、大将様から主上が今度の事でどれほどお心を痛めておいでか、お聞かせいただきましたので、その御心をつたない私の琴の音に乗せて見たく存じます。どうか、お聞き届けいただきますよう

更衣様も、主上も、しばらく無言でいらしたが、やがて

「その演奏を聞かせてもらいましょう。あなたが語りたいといつ、主上のお心を」

そう、更衣様がおっしゃられて、主上もつむずかれたご様子だった。

「あつがとつひゞれこます」

私はお礼を申し上げると、わいそく几帳のつけた回り、琴の音を奏で始めた。

疑惑の目

私の演奏が終わると、お一人とも感慨深げに私にお言葉をかけて下さったが、実は私は演奏に納得はできていなかつた。

確かに私は大将様から、主上の心情を教えては貰つた。そのお気持ちのありようも分からぬでもなかつた。

でも、やっぱり私には男君であり、この国の帝であらせられる主上の本当のお気持ちは分からぬ。

以前の更衣様のお気持ちは表す気持ちで弾いた時は、そこに自分だつたら、という思いを重ねる事が出来たが、今度はそう言つ訳にはいかなかつた。思いをはせるにも限界がある。所詮は自己流の解釈だという、納得のいかない部分が残つていて。まるで自分の心に嘘をついたような気持があつて、すつきりしない。

それでもお二人は、私への気遣いだけではなく、本当に何かを感じられて、お一人の心を寄せる事が出来たようなのだ。そこも私は釈然とは出来なかつた。

居心地の悪さに、私は一人で先にその場を下がつてしまつた。

叔母の局に戻ると、局の前に大将様が待ち構えていた。私が先に戻る事を読んでいたようで、私は面白くない。

「女人の部屋の前でどうされたんです？」

「そろそろお戻りになる頃かと思ったので。演奏はいかがでしたか？」

「こちらにも聞こえていたんじゃありませんか？ 主上にも更衣様にも、ご満足いただけたようです。お約束は果たしました」

琴の音というものは意外と良く響く物なので、同じ梅壺の敷地にいれば聞こえていたはずである。

「そのようですね。ただ、ご自分では満足されてはいないようだ」
大将様は私の顔色を見ていった。

「私などには主上のお心など、図れるはずもありませんから」

「そう、おっしゃると思いました。姫」
大将様が、私をまっすぐに見つめられる。

「物事を表現するという事は、決して自分の心をさらけ出す事ではありません。勿論心をこめる以上はそういう部分もありますが、それだけになってしまっては決して人に受け入れてはもらえないのです。私は人に歌を送る時は、その人の事を思います。どんなに儀礼的な歌であってでもです。それが私が歌詠みである時の心のありようなのです。そこには当然私の思いも込められます。しかし、歌とはそれだけではありません」

大将様は、あの、諭すような態度で私に話しかけられる。

「歌とは歌を詠む者と、それを受け取る者がいて初めて成り立つものです。一方的に詠み捨てた歌は歌とは言えない。それはただの独

りよがりでしかありません。こちらがどう思おうが、受け取った側がどう感じるかによつて、歌の解釈など変わつてしまふのです。こちらが喜びを歌つたつもりでも、相手には悲しみに受取られるかもしれません。しかし、それこそが本当に生きた歌なのです。受取つてくれた人が、何らかの感動を覚える。それこそが歌の価値です。これは雅楽にも言えることではないのでしょうか?」

「受け取つた人の感動……」

「そうです。自らの一方的な感情を相手に押し付けて、分かつてもらうことだけを目的にしては、そこに本当の感動は生まれません。受け取る人が、自らの人生観や、心情に合わせて感じ入つて下さる。そのことこそが大切なのです。あなたは物言えぬ女人の心を伝えるつもりでいるかもしれません、それではただのおごりになつてしまふ。人の心というのはもつともつと深い物なのです」

「大将様は、私が間違つているとおつしやるんですか?」

「そこまでは言いませんが、あなたはもつと、視野を大きく持つ必要があるでしょう。それが難しいのであれば、中納言家の姫のお世話だけに明け暮れるか、郷里に帰つて父上のそばで暮されるか、さもなければ私の庇護の下で暮らされるのがよろしいでしょう。そうでなければどこかできつと、人の心につまずく時が来るでしょう」

「(1)自分は人の心につまずかれた事があるようにおつしやるんですね」

わたしはついつい、皮肉で返してしまつ。大将様のような方にそんなご経験があるとも思われなかつた。

「ありますよ。政事も恋の道も人とかかわらなければ成り立ちません。人の心に流れる感情とはどうにもできぬもの。現に、あなたは私をそでになさつたじゃありませんか」

大将様は笑いながらそう言われる。まるで幼子をあやすような口ぶりで。

そんな風に言われると、私も意地を張つてはいられなくなる。何よりも和歌の道ではこの方は一流の歌人。その方の言葉には重みがあつた。

やはり私にはどこかにおどり心があつたらしい。さつきの私の琴の音も、お一人がご自分達の立場に重ねられることが出来たのなら、それで十分な価値があつたのだろう。

「ですからあなたは、今度の事を後ろめたく感じてはいけません。こう言う事が起こるのが後宮の定め。気後れしたり、強気に出過ぎた態度でいては、かえって人に付け込まれますよ。堂々としていらっしゃい」

言われて私は気が付いた。大将様は私をお諭しになるだけではなく励ましに来て下さったんだ。

やつぱりこの方は悪い方ではないわ。たとえ公達として私を戸惑わせることがあつたとしても。

事が起つたのは、その夜も遅くなつてからの事だった。

「火事だ！」

役人のそう騒ぐ声に皆が驚いて飛び出してくる。

「火元はどこです！　主上は？　更衣様は？」無事ですか？」

小侍従が役人に叫んで聞いていた。

「お一人は御無事です。他の女御様方にも害は御座いません。火元は麗景殿の一部のようござります！」

問われた役人も叫び返して、麗景殿の方へと走り去つて行つてしまつた。

御所中が騒然としている。どうやらけが人は出でていらないらしいが、その騒ぎは結局夜が明けるまで続いてしまつていた。

京の街で火事は決して珍しい物ではない。むしろ、田舎よりも可燃物に囲まれた暮らしをしているので、ちょっとしたボヤから、邸を舐めつくす大火まで、火事は日常茶飯事だった。

勿論御所と言えども例外ではない。幾度となくボヤや火事騒ぎは繰り返されている。時には他の邸に御所の機能を移したことだってある。役人たちの速やかな処理により、大した大事にならずに済んでいるというだけの事だ。

しかし、御所での火事は色々な思惑をかきたてられてしまう。今回の大火もそうだった。

なにせ、中宮様がお帰りになる直前に、そのお住まいになるべき麗景殿で起こった火事である。しかも梅壺の更衣様の御父上の御謹慎中という、最悪の時。当然、一層冷たい視線が梅壺へと注がれた。

しかもその視線は、私への疑惑という形で現れたのだ。

私が梅壺の更衣様に心を寄せているのは一目瞭然だつた。しかも、私は大将様と関係が深いという事になつてゐる。その大将様の御父上である大納言様が、更衣様に圧力をかけられ、私が面白く思つていない事も、大将様に反抗的な視線を送つていた事も、皆が知つてゐる。さらには言い争う声を聞いたという者までいた。昨日の話に尾ひれがついたに違ひない。

その夜のうちに起こつた火事。しかも私は他の女房よりも、先に退出しているのだ。

麗景殿では私が大将様との痴話げんかの果てに、麗景殿に火をつけたという話が持ち上がりつてしまつたらしい。

私が更衣様に後ろめたさを持つていていた事や、大将様に気強い態度を取つていていた事が、さつそくあだになつてしまつた。大将様の気遣いが当たつてしまわれた訳だ。当然麗景殿から私への苦情が來た。

「命婦に使われてゐる、花房とかいう方を女雅樂から外していただけませんか?」

しかしこれは、小侍従がきつぱりと断つてしまわれた。私の琴は、主上も、更衣様もご所望だからと。

「何の証拠もないのに、言いがかりで主上の『ご所望を無視する訳には参りません。女雅楽は予定通りに行われますので、そちらもつまらない噂に浮足立つのはおやめ下さい。中宮様への御威光にかかわりますよ』

ドンと構えた小侍従にこんな事を言われたら、あちらもぐずぐずとは言えないらしい。やはり小侍従は優れた女房らしく、向こうもしぶしぶ承諾した。

こんな風に後宮での身の振り方を身につけ、周りの意見に振り回されず、更衣様の行く末にいつまでも心を傾けられ続ける。

これは思つた以上に大変な、そして素晴らしい生き方だ。小侍従の姿を見て私は本当に恐れ入ってしまった。

小侍従は御自分の事を「今もつて現役」と、胸を張つていた。私は下世話な皮肉で返したけれど、そんな事をして良いような言葉ではなかつたんじやないか？　主人と定めた方を愛し、守り、お育てし、我が子も育て、さらに男君にも愛される。その男君たちにどんな態度を取られようとも、女人の知恵とやらで乗り切つてきたのだろう。

小侍従は家庭に入らずに今だに御所勤めをしている。おそらく男君とも色々あつたに違ひない。それでも自己を通しながら、他人の事も認めて生きている。これこそ、女人らしい、真心のある生き方

なのかもしない。

私は挑み心で凝り固まつていた自分を反省せずにいられなかつた。我を張つてばかりでは琴の音で人の心など表しようもない。大将様も、小侍従も、ここまでして私に琴を弾かせようとして下さっている。私の琴の音は、私ひとりの武器なんかじやなかつたんだ。

現実的な私への疑惑は、大将様が役人へ証言して下さつたことで晴れらしい。でも、火が出たのは私と大将様が会つた後のことでし、証人が大将様という事で、人の目は一層厳しくなつてしまつたけれど。

それでも私は胸を張つて麗景殿へと向かう。大将様とのお約束通り、自分の琴の音を信じるために。

大勢の好奇の目の中で琴を据えて練習を始める。

正直、お父様や、お義母さま、康行と言つた故郷の顔が懐かしい。私はここで何をしているのだろうと思つ。

でも、ここで私を認めて下さる方が一人でもいる限り、私は演奏をやめたくない。やめられない。

私は明日の雅楽で、琴の音に何を込めようか？ そう迷いながら、ただひたすらに琴の稽古に励む。

外野の声に心を惑わせないようにと、集中をしながら、私は一心に琴を弾いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6635y/>

藤の花の匂う頃

2011年11月23日18時47分発行